

諸隈中隊長戦陣日誌（前編）①

一大東亜戦争前

諸隈 良夫
陸軍航空士官学校
第7中隊
第3区隊長



A. まえがき

秩父119号(平成25年4月号)から秩父124号(平成26年7月号)まで、6回に分けて諸隈中隊長戦陣日誌(マレー・シンガポール攻略作戦)を連載しましたが、その日誌には、大東亜戦争開戦直前の昭和16年10月1日から始まり、開戦前夜11月18日上海から輸送船に乗り、開戦と同時にタイ領に上陸、マレー半島に侵攻し、シンガポールを占領後はアラフラ海に進出、敵の反攻に備えて陣地を構築中、昭和19年に陸軍航空士官学校の区隊長として内地に呼び戻される間の出来事が記載されている。

今回新たに発表する大東亜戦争開戦前の日誌には、諸隈中隊長が陸軍士官学校を卒業した直後、出征するところから始まっている。まず、いきなり仏印に進駐した第5師団の第42聯隊に赴任を命ぜられ、その後まもなく部隊ごと上海に呼び戻され、上海周辺の治安を維持するための清郷工作にかり出され初めて実戦を体験する。

その間の新品少尉の活躍ぶりが自由闊達に記載されている。軍律厳しい軍隊の中でよくもこのように自分の気持ちをはっきり述べる事ができたものと驚くばかりである。

なお、諸隈少尉が任官した当時の世界情勢、特に日支事変の推移を次に記載し、本日誌解説の一助にしたい。

B. 日支事変の推移

昭和6年(1931)

満州事件 9月18日南満州鉄道が爆破され満州軍閥の長であった張作霖が爆死した事件をきっかけとして関東軍は奉天、南満州を占領する。

昭和7年(1932)

満州国建国 関東軍は北京に幽閉されていた廢帝溥儀を脱出させ、3月1日満州国を建国させる。

昭和10年(1935)

広田三原則 11月20日広田外相は蒋介石と南京会談で広田三原則「中国の排日言動の取り締まり、満州国の承認、共産主義勢力の排除」を承認させる。しかしその後も中国各地で排日運動、邦人の虐殺事件が相次いだ。1935年から1936年の間に主な事件だけでも20件にも及び殺害された日本人は30名を超える。

昭和11年(1936)

成安事件 12月蒋介石は張学良に監禁され共産党との合作を迫られ、これを受諾、抗日姿勢に転換する。

昭和12年(1937)

廬溝橋事件 7月7日北支に駐留していた日本軍の演習中に実弾が発射され、日本軍と中国国民党軍との間で紛争が始まった。一説によれば、この銃撃は共産党の仕業ともいわれている。

蒋介石は直ちに4個師団と戦闘機を華北に派遣した。日本軍も支那派遣軍の増強を決定しながらも現地解決に努力した。

相次ぐ排日運動

しかし、7月25日朗坊駅で電線を修理し

ていた日本兵を中国軍が襲撃した**朗坊事件**、7月26日、広安門居留民保護に駆けつけた日本軍を中国軍が銃撃した**広安門事件**等が相次ぎ、日本軍は7月28日北支で攻撃を開始し、中国軍を撃破する。しかしその翌日、中国人部隊及び学生による日本人居留民に対する大量虐殺事件、**通州事件**が勃発した。この事件は居留民385名中225名（日本人114名朝鮮人111名）が極めて残虐な方法で虐殺されたもので男女の性別の分からなかった者が34名も存在したとのこと。

第二次上海事件 8月9日上海の非武装地帯で日本海軍の大山中尉が中国保安隊の銃撃を受け殺害された(大山事件)。

度重なる中国の暴挙に対して近衛内閣は8月15日今までの不拡大方針を放棄し、全面戦争に踏み切った。

日本軍戦果拡大

8月15日日本海軍は渡洋爆撃を開始し、南京、南昌、杭州等を襲撃した。

11月5日には日本軍が杭州湾に上陸、上海、南京攻撃を目指した。

12月13日**南京占領**、華北では12月27日済南を占領。

昭和13年(1938)

北支では、5月19日 徐州を占領。

中支では、10月27日 武漢三鎮を占領。

南支では、10月21日 広東を占領。

蒋介石は重慶に首都を移した。

昭和14年(1939)

ノモンハン事件勃発 5月11日

第二次世界大戦勃発 9月1日

昭和15年(1940)

中華民国南京国民政府樹立

汪兆銘が3月30日南京で親日政府を樹立。

日本軍北部仏印進駐 9月23日 諸隈少尉仏印進駐直後の歩兵第42聯隊に赴任。

日独伊三国同盟樹立 9月27日

昭和16年(1941)

東条内閣成立 10月16日近衛内閣総辞職後成立した東条内閣は、大東亜新秩序を建設するための米英蘭戦争を決意する。



昭和15年当時日本軍占領地

C. 諸隈少尉第42聯隊赴任の経緯

上記のように、日支事件は昭和12年の廬溝橋事件、第二次上海事件を契機として一挙に全面戦争と発展した。その年の11月に杭州湾に上陸した日本軍は12月に南京を占領、13年5月には徐州、10月には武漢三鎮を攻略、北京-漢口を結ぶ京漢線の以東、上海地区以北の地域を攻略し確保した。昭和15年になると王兆銘が親日政府を樹立（王兆銘軍は和平軍と称せられていた）し、和平軍は日本軍に協力して、上記地域に対する蒋介石軍、共産軍の侵入を阻止していた。



竹矢来で共産軍の進入を阻止する和平軍の中国人兵士

一方、重慶に首都を移した蒋介石軍に対して米英は仏印経由で、戦略物資を送っていた。日本軍はこの援將ルートを壊滅させるために、昭和13年10月に占領していた広東を足がかりにして、南寧、欽寧、龍州と軍を進め、昭和15年7月には仏印の国境近くまで進出していた。

そして、日本は昭和15年の6月にドイツに敗れたフランスが樹立したビシ-政権と交渉して、仏印経由の援將ルートの閉鎖と日本軍顧問団の受け入れを認めさせた。さらに、8月末、日本の松岡外相とフランスのアンリー大使の間で、日本軍の仏印への進駐を認めた協定（松岡-アンリー協定）が成立した。この協定に基づいて日本軍の第5師団は仏印の国境近くの鎮南関に待機

していた。

かねて受領していた命令によって、9月23日になって第5師団が仏印への進駐を開始した。しかし、ビシ-政権の決定を受け入れなかったドンタン要塞等のフランス現地軍との間で戦闘が起こった。この戦闘は数日で日本軍によって鎮圧されたが、諸隈少尉等の補給部隊が到達したのは、その直後の28日、ドンタン要塞のすぐ近くのランソン市であった。諸隈少尉はこのランソンにおいて第5軍第42聯隊の聯隊長に赴任の申告をし、速射砲中隊の小隊長を命ぜられた。（川島順記）

諸隈中隊長戦陣日誌（前編）

1. 陸士卒業と同時に出征

昭和15年9月13日(金)

「櫻」を以て横浜駅出発、13日は母の誕生日なり。西洋流に言わば13日の金曜日二つ重なれば幸いなりとやら。

見送りの人々、母、姉、小林、合田、松野、野村の小母さん、篠原町国婦会長坂井千里、柿沢久雄、合田の小父さんの諸氏。静岡で内藤、溝口（小学校の友人）に会す。神戸で柏木さんの小母さんとその妹に会い、チョコレートを買う。



諸隈少尉第42聯隊への赴任の旅

二等の乗心地悪からず。この辺、無我夢中にして、典令を読みながら居眠りせしことも有り。隣席に山崎少佐殿あり、ときどき話をなす。

9月14日(土)

朝8時山口着。町で朝食を喰うと思つたら午前中食堂営業停止とは。竹下さんの下宿の賄で危うく餓鬼を免れた。和田、松元、佐々木、田代の連中は昨日湯田で飲んで泊まったよう。皆青い顔をしとる。海野、青木は元気だった。特に青木は正教官で教官振りも拝見したが仲々アッパシ。補充隊長に申告。注：切実なる娑婆の風に初めて吹かれた如く感ず。

16時半頃宇品着。秀明兄が面会に来て最後の(内地における)脱走をやって広島町へ出た。

9月15日(日)

16時半頃、吾々を乗せた高雄丸は出航。別に何とも感じない。別離の悲哀も何も感ぜず。正に学校で現戦に出発すると同じ。瀬戸の海は静かだ。潜水艦一艘追い抜きて進む。手を振る。

9月16日(月)

朝、下関着。午后門司岸壁に船を着けたら部隊が乗船した。吾々の宇品出港と違って女学生やらブラスバンドやらえらい歓送だ。吾々は反対側の甲板でポカンとしていた。同側は譲ってやって。注：稍羨望しあり。

9月17日(火)

玄海灘は大分揺れる。速やかに睡眠せしを以て安全なりき。

9月19日(木)

巡察将校勤務。

隣席に山崎少佐殿あり、時々話をなす。

9月21日(土)

黄埔(南支広東の近くの港)上陸。一泊、初めて苦力を沢山見た。その他支那人が沢山居る。やっぱり支那だ。

注：吾人が敵は此の色黒き苦力の仲間なるかと妙に感ぜり。

9月22日(日)

汽車で広東(現在の広州市)に入り、軍司令部訪問、大尉参謀一人居る。愛甲部隊解散。兵站で前田少尉に会す。黄埔に引返し中華丸に乗船。広東では前田少尉に連れられて病院に丸谷副官を訪れたので何も見物する暇は無かった。

9月23日(月)

朝出港。

9月24日(火)

船中腹具合が悪くて衛生下士官に健胃錠を貰う。

9月25日(水)

推車嶺に上陸。自動車に依り欽縣(現在の欽州)着。この間の景色内地農村に異ならず。

9月26日(木)

早朝、中村兵団のみ急げとの事で近衛の連中と別れて出発。呉村墟着。何しろ暑かった。蚊帳の無いのに閉口せり。

9月27日(金)

寧明着。茶谷大尉同行さる。

(そして、鎮南関で国境を越えて待望の赴任先の第42聯隊が駐在している仏印のランソンに向かう。) (続き)



歴戦の跡を偲ばせる戦陣日誌の表紙

戦陣日誌の第1頁、昭和15年9月13日より。最初に日誌記載の決心が述べられている。

諸隈中隊長戦陣日誌（前編）② 一大東亜戦争前

諸隈 良夫
陸軍航空士官学校
第7中隊 第3区隊長

目次

- A. まえがき
- B. 日支事変の推移
- C. 諸隈少尉第42聯隊赴任の経緯
- D. 諸隈中隊長戦陣日誌（前編）
 - 1. 陸士卒業と同時に出征（秩父139号）

2. 諸隈少尉仏印の第42聯隊に着任

昭和15年9月28日(土)

鎮南関を越えて遂に佛印に入る。ドンタン經由ランソン着。聯隊復帰。申告、直ちに聯隊長より訓辞あり。



北部仏印に進駐した日本軍(Ameba より)

9月29日(日)

10時集合、師団長、旅団長に申告。現在、聯隊本部の居る建物は佛人中・少尉官舎なり。家具は其の儘あり。筆筒中には

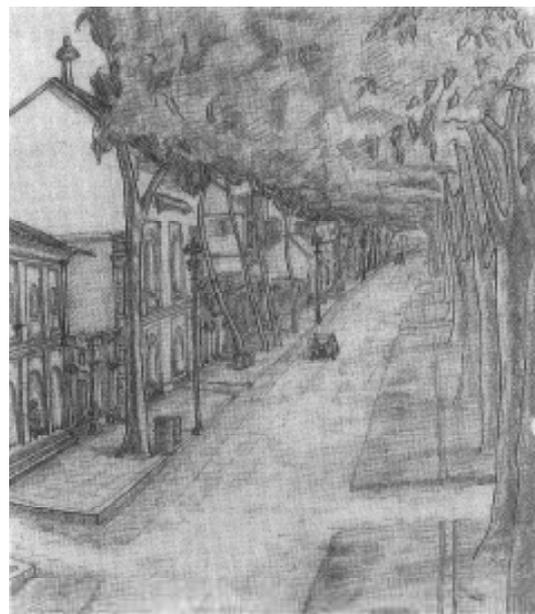
テーブル掛、ジャケット、ヘルメット等多数あり。掠奪心理も解る、実際に欲しくなる、然し其れは軍人ではない。

中村副官がコルセットを腹に巻いて「健康帯があった。エーモノがあった。」と喜んで居るのは滑稽だ。

此の家には3・4歳の子供が居たらしい。其れも女の子らしい。家具にしても衣類、下着にも或いは玩具にも使われる。大部分を置いて逃げた子供は可哀相だ。配偶中隊は速射砲に決定。速射砲と言えば、鹵獲品中の敵の速射砲は優秀だ。分解搬送こそ出来ないが照準機が円滑でガタがない。ゴムタイヤで脚が太く長い。

佛印の初印象・鎮南関から佛印領に入ると先ず電柱がよくなる。道路がよくなる。家が白くなった。人の服装が良くなる。何れも小奇麗になったと言う一言につきる。

佛印人（安南人）は皇軍に好意を有し吾人によく敬礼をなす。佛人の影響で南ランソンにはスマートな青年が町を闊歩しある。注：荒涼たる南支を通過してホットしあり。山に木の多きも南支と異なる。



仏印ランソン (野村克己・絵)

9月30日(月)

各大隊に申告に廻る。三大隊にて、泉、松原中尉に会す。泉中尉頗る快活なり。恵良少尉負傷の真相が自殺とは、意外も意外、大変な意外だ。気合はあるが手段が悪い。神経衰弱でも無かったか。

○少尉任官

10月1日(火)

中隊に入る。第三小隊長予定

10月4日(金)

戦闘を中止し内地に帰るとの噂頻りなり。我輩の心中甚だ面白からず。

駐軍を止めて他に移動するは喜ぶも内地へなんぞ帰れたもんじゃない。国境戦に数日の差で遅れて甚だ残念なるに戦闘一度もやらずに帰るなんて飛んでもない。

10月5日(土)

午前1時間用の無い兵20名集めて軍紀教練実施、銃がないのだから何もする事がない。敬礼演習で済ます。Ⅲ(第3大隊)本部で会食有り。

10月6日(日)

巡察で3時巡る。旅団衛兵は全部眠っていたに違いないが通り過ぎて捉える事も出来ず残念なり。中隊娯楽会あり。

10月7日(月)

将校私物品検査、俺が当番と一緒に行李につめるのを見て「見習の当番」と悪口を言った将校があるが、何をぬかすか。貴様等は当番を何と心得るや。当番は将校多忙の際の補助なり。陛下の赤子なるが自分の事は出来る丈自分でなすべきだ。当番に詰めさせて傍観する輩を俺は心で笑ってやった。

講評の際「近頃、聯隊砲はだらけて居る。速射砲も然り」と一喝を食った。何を抜かず。現役の俺が来たからは聯公を驚かす丈の模範中隊にしてやるぞ。

注：現在の中隊長として当番使用の状況とは隔世の感あり。若かりしかな。

部隊の日直将校に服し、夜松原中尉殿の居室で話込んで1時頃帰った。

10月8日(火)

朝の点呼報告に松原中尉の所へ行くべきか、旅団副官が異常なければ行かずとよいと言ったそうだから行くか行くまいかと迷ったが積極的を選んで報告に遠路行ってきた。行って良かったと思う。若い者は積極的労苦の多い方を取るべきだ。風呂(ドラム缶の)が出来た。

10月9日(水)

慰問袋を買った。成程嬉しい。下関商工学校の一年生からだ。昭和14年3月の発送で、手紙の文句に「寒い満州の兵隊さん」は正に傑作だ。

暹佛軍の構築した陣地を見に行った。松元の案内にして佛軍の陣地は出撃を顧慮して居ない。全く消極的守勢防禦だ。戦車の仕方も右の如し。全然前に出る意志が無い。

消極的佛蘭西敗北の現実を此処にも見た。此では少将以下千数余名捕虜になるのも当たり前だ。

恵良少尉の経過が悪く時々発作が起きる相だ。誠に心配だ、何とか落附かせる方法ないものかな。

注：少将とは「メヌラ」少将なり。



フランス軍の陣地

10月10日(木)

先に戦病死せる釜本兵長の慰霊祭を施行す。午前安南兵の死体搜索。

10月11日(金)

散髪す。剃る前に先ず水を塗り石鹸をつけ次いで剃毛でもじゃもじゃやられたには吃驚した。6時半より査閲課目の教練実施。助教の領分に教官の入るの不可。助教を更に教育の要あり。会報によると慰安所開設さる。チョンガーの近寄る所に非ず。

10月15日(火)

豪雨の為洪水。鉄橋付近で計るに約8米増水なり。附近の安南家屋が多数水びたしになった。

10月17日(木)

部隊日直将校、申告の後、佐々木と泉中尉殿の所に到る。「バン」の奴がおめかししとった。旅団長送別会、会食後藤井中尉他見習士官4名と延長して飲み歩く。帰途ピー屋を冷やかす。黒き戸を叩くと直ちに一人の男出てき吾々を中に導く。店を通り抜けて裏にたたきの広場あり。其の向こうに部屋ありき。其の男の案内で一番端の部屋の扉を開くと居た。部屋の中は広さ四畳半位、ダブルベッドが一つあって娼婦が一人横になって居た。

話の種に一見はしたが経験は真っ平御断り、俺は童貞で編成式に臨む。若し生あらば煙草も藤井中尉の注意の如く、絶対に中止、戦闘間等必要の場合を除き癖になるといかんから止める。

10月18日(金)

靖国神社臨時大祭

10時15分御親拝時、中隊一同整列して遙拝す。重ねて英霊に感謝を捧ぐ。師団長の将校に対する離任の挨拶あり。此の師団長悲憤慷慨するのはよいが、軍司令部、大本営に対し、不平不満を抱きあるは絶対に不可なり。それを部下将校の前に於いて吐露するに於いては如何に中将たりと謂えども一見習士官の吾人が大反対だ。大いなる修養を要す。絶対服従の前には正に滅私なり、個人の感情毀誉褒貶は総て一

擲せざるべからず。

上官の命は上御一人の命なり。

注：師団長は現泰国軍司令官中村明人中将にして今に到るも見習時代の意気を壯とす。

10月28日(月) 晴

約十日間サボったが任官して嬉しくて仕様がなから又つける事とす。

休養日にして兵外出す。室内に居ても退屈だから散歩がてら外へ出た。将校の服を着て歩くと皆俺に注意する様な気がする。背が低いと気になって仕様がなから。

市場の隣の安南人の少年の居る所でニューームのコップを一つ買って来て帰りに床屋に寄る前に安南人がたかって路地を覗いて居るから何かと思ったら二三人やって来て俺に来いと言ったから行って見たら、下士官が泥酔して軍刀を抜いて出て来た。軍刀をもぎとってやろーかと思つたが、曲がった軍刀を直して一生懸命鞘に入れよーとして大人しいから何も言わずに引き上げた。後から考えると何とかして中隊迄送り届けるのが最上だったかも知れぬ。決して怖いか危ないという気は無かつた。ああいう処理法を泉さんに訊ねて置く要あり。食事の時に昨日喫茶店で俺がもてたと言って中スケや野村見習士官に大分言われた。若いのが女に持てるのは当たり前、上海に行ったら君子危きに近寄らずが第一。

母おれば 嬉し涙よ 晴姿

母かけて 見せる人なき 晴姿

若かろが 今年十九の 少尉じゃもの

町歩く 誰もが見てる 様な気がし

取出し 付けては外す グルメット

嬉かな フランス短袴 影法師

我ながら いきな姿の 影法師

夜くれば 蔭を眺めて 嬉しがり

足毎に 長靴が鳴るや 晴姿

今日よりは 忠より他に ない覚悟

任官日 佛印の地も 日本晴
例の毎 長靴歩くと 冷やかされ
案外に しわが悪いねと すぐ言はれ
10月29日(火) 晴

午前TA(速射砲)教練。

対戦車壕の堤を利用し不意に出でて行う
射撃と変換用意の実練す。

「砲を据え」より第一発発射迄約30秒に
短縮せるも更に四番の訓練によりて短縮の
余地あり。午後16時半より馬運動、長靴
で初めて馬に乗った。夜、区助ハチ公に手
紙を書く。裏に「諸隈少尉」と書くのも嬉
しいものだ。

11月3日(日) 晴

良き朝に 君が代響く諒山城
ふるさとは 菊の香かほる 此の良き日



注：諒山城＝ランソン城 (続く)

平成30年10月号 秩父 141号

諸隈中隊長戦陣日誌(前編) ③ 一大東亞戦争前

諸隈 良夫

陸軍航空士官学校

第7中隊 第3区隊長

目次

- A. まえがき
 - B. 日支事変の推移
 - C. 諸隈少尉第42聯隊赴任の経緯
- 諸隈中隊長戦陣日誌(前編)
- 1. 陸士卒業と同時に出征(秩父139号)
 - 2. 諸隈少尉仏印の第42聯隊に着任(秩父140号)

3. 師団再編成のため上海に移動

(注：大本營では南方進駐に備えて、第5
師団を近代的な機械化部隊に改組するため
上海に呼び戻した。)

昭和15年11月15日(金)

ランソン出發、同日夜海防着

11月23日(土)

海防(仏印のハイフオン)出發

11月30日(土)

上海吳淞着、揚行鎮兵營に入る。

12月25日(水)

「自動車部隊の指揮並運用」修得の為南京
金陵部隊に約二ヶ月の予定を以て派遣せら
る。

12月30日(月)

第七中隊附に転ぜらる。

昭和16年

1月1日(水) 曇

南京城に新春を向ふ。

年頭の所感、今年は武運に恵まれたる年
でありますように。中山陵に参る。

1月2日(木) 晴

日直将校

3月1日(土)

南京より帰来す。

3月2日(日) 晴暖

総軍参謀吉橋少佐に面会、本来の任務遂行、飽く迄エネルギーギッシュなる将校となるべきを訓じ給う。感ずる所あり。

3月11日(火) 雨のち晴

代日休暇。

伝染病疑患者更に5名を増加す。防疫委員を命ぜらる。

練習用具庫整備の要あり。

吉橋少佐殿より教えられたる「奉公表」は開始してより2日なるも効果ありと認む。要は意志にして三日坊主ならざるを要す。

姉宛に葉書を出す。重荷ではないが此の間よりの心配が解けた。早く到着するとよいが。

3月12日(水) 晴

日本晴れの快晴。

将校集会所の菜種を中隊舎前に移植す。

少しは和かなる気分も可なるべし。

本日一日使用し防疫に勉めたるに案の定伝染病は真性ならざる事判明す。先ずは一安心。

母と姉に葉書を出せり。

日誌を書きつつ犬の吠えるのを聞けば我が家の机に向かう如き心地す。

朝晩は寒いが確かに春だ。日中睡い。正に犬は猫を追うを忘れ猫は鼠を取るのを忘れるの候だ。奉公表の御蔭で今日も参拾分だけ勉強した。

3月20日(木)

自動車事故で負傷す。

3月22日(土)

呂号演習の為部隊出発す。(注：呂号演習とは、大本営が南方進行に備えて第5師団に対して敵前上陸の訓練を九州の唐津海岸で実施させるための演習である。諸隈少

尉は自動車事故で負傷したため置いてきぼりになった。)

注：週番士官室には大木縁上等兵心尽しの梅花活花在り。

3月27日(木) 晴

漸くにして廿日からの負傷のホータイが取れた。傷跡は頭部は思われるより大にして頬部は小なり。一週間風呂にはいらざれば頭部ふけ溜まりて痒し。

二月号偕行社記事を読みて国軍の装備の不十分なるを今更の如く痛感す。正に如何に竹槍三百万本を以てするも一戦車に破らる。世界の趨勢の昔日の歩兵を軍の主力とせず、戦車を従え飛行機の絶大なる協力を有し、有力なる火力装備と自動車、飛行機等による卓越せる機動力を備えたる突撃兵を主体とせるなり。

我国の編成はもはや第三等国以下、対支戦闘用劣等装備なり。

軍旗際

3月28日(金)

休務、野球、銃剣術、相撲の競技会あり。中隊は野球は優勝、銃剣術、相撲は第二位を占む。

注：3月26日より部隊主力は呂号演習の為出動しあり。

4. 上海近郊の古戦場を周遊

4月1日(火)

自転車行軍を以て大場鎮、廟行鎮、敷島の庭を巡る。

注：大場鎮、廟行鎮は、昭和7年1月から3月にかけて上海の共同租界周辺で起きた日華両軍の衝突事件で主戦場となった地名である。

当時の上海には日、米、英、伊の国際共同租界とフランス租界があった。日本の租界は北四川路及び虹口方面に存在し約3万人の邦人が居住していた。

また、上海郊外には十九路軍が約3万名の兵力を集中していた。この十九路軍とは中華民国の蒋介石の国民党軍傘下の地方軍で蔡延鎔が軍長をしていた。



上海郊外大場鎮・廟行鎮・敷島の庭

満州事変直後の当時の上海では、排日運動が盛んで、昭和7年1月8日には、日本の僧侶等5名が中国人に襲撃され死傷される事件（日本人僧侶襲撃事件）が起き、それに抗議する上海在留の日本人会の青年と暴徒との間で乱闘となり、日本人2名が死傷を負った。日本政府は反組織の即時解散等を要求していたが、その交渉のさなかの1月28日、十九路軍は、日本租界の守備隊を襲撃し、守備隊は90余名の死傷者を出した。

日本の海軍及び陸軍は応援部隊を派遣し、十九路軍に対し、租界から20 km後退することを要求したが、十九路軍は蒋介石の意に反してそれを拒否したため、日本軍は2月20日総攻撃を開始した。廟行鎮には鉄条網とトーチカによる強固な陣地が構築されていたが、かの有名な爆弾三勇士がこれを爆破し、日本軍の進軍を助けた。

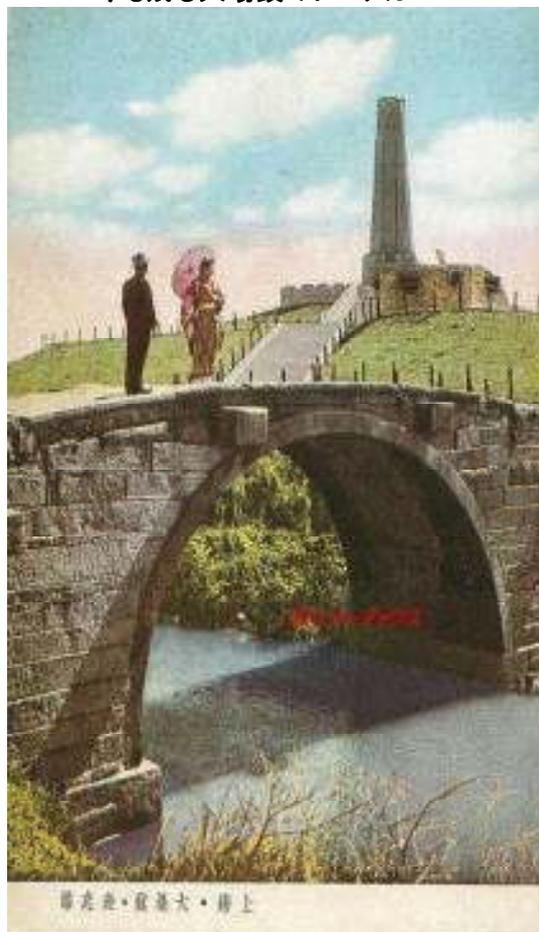
大場鎮は廟行鎮の後ろにある敵の主陣地であるが、最大の激戦の後これを占領した。その後、日本軍の援軍が十九路軍の背後に上陸したので、十九路軍は敗走し、3月3日、日本軍は戦闘中止を宣言した。

十九路軍の蔡延鎔はその後、蒋介石と対

立して、1993年（昭和8年）福建省に福建人民政府（中華共和国）を設立するが、蒋介石の攻撃を受けて僅か2ヶ月で滅ぼされた。



今も残る大場鎮のトーチカ



上海・大場鎮の絵葉書

敷島の庭は、日本租界と廟行鎮との間にある第一肺科医院の敷地内に或る庭園で、日本庭園風に仕立てられている。この庭園で昭和15年4月皇軍慰問観桜大会が開か

れ、各種のイベントの中で『蘇州夜曲』の撮影に来た長谷川和夫と李香蘭が挨拶した。



上海・敷島の庭

4月1日(火) 続く

敷島の庭に於て大河内寛市一等兵は歩41 經理部神田弘伍長(泥酔しあり)に左肘部関節を斬らる。2時前后。

処置

(1) 大河内は現場に於て師団衛生隊半田中尉の応急手当を受けありしを以て園外に搬送。

輜重聯隊の乗用車に依頼第二野戦病院に入院せしむ。手当一大林中尉。

(2) 加害者神田伍長は憲兵拘引しありしを以て目撃者2名を憲兵の要求により残置す。

(3) 爾他は直に集合、前任篠田伍長に引率帰營せしむ。

其の後の状況

(1) 余は下士官一、衛生兵一と共に大河原に同行しありしも手当一落せるを以て、5時病院を出て7時(19時)帰營す。

(2) 泉大尉殿の指示により八時出発「四一」に到り留營司令三好少尉經由岡崎中尉と談話。

最大眼目たる等傷決定の為、憲兵をして手を引がしむるに意見一致す。

(3) 再び「二野戦」に到り、大林中尉に問うも現在の儘の状況に於いては公傷となり難きを知る。

(4) 四一の諸官と同行、憲兵分隊に到り、概ね当方の意向を伝え(隊長不在)帰營す。二時。

4月2日(水)

菅原大尉に同行を請ひ、昨日の打合せにより二野戦に到り大林中尉に面会、其処より四一の諸官と憲兵隊長を訪ね示談を承知せしめた。大林中尉に断りたる后帰營報告。

公傷の為の現認証明書には演習中土民の残置せる斧にて負傷せる如くす。

帰途衛生隊に於て半田中尉に謝礼、経過を述ぶ。

事件発生后概ね24時間以内に各方面の努力と好意により一段落せるも中隊長、大隊長、聯隊長不在間に事故発生監督不充分の責任は痛感す。

神武天皇祭

4月3日(木) 晴

大河原の現認証明書を携え6時半出発、二野戦に赴きたる後、当番田村と共に上海に外出、東和劇場「戸田家の兄弟」を見る。筋は略「オーバーザヒル」に似たり。佐分利信の二男坊は正に適役なり。白木屋、並双葉屋に寄りて4時34分天通庵発のガソリンカーを以て帰来す。

田邑の友達は師団の出発を五日と言う。デマにせよ何にせよ甲戌作戦近きを思わしむ。

作戦は まだ来ぬかと 予定表

(教育予定表作成)

藤山唯一封書許可を得んとす。理由 結婚せんとする女性他に嫁がんとし、これを止める手紙、小説の如く本人に気の毒なるも面白し。



上海の東和劇場（右・戦後解放劇場となったが現在は休演中）

4月4日（金）晴

手榴弾が暴発す。幸いにして自他負傷者なし。明日午前手榴弾投擲を実施せんとして平常練習用具と思ひありし、手榴弾（練習用具庫にあり）を取扱いせしも発火し、東側入口に擲げて爆発せしむ。幸いに事なきを得たり。爆発位置より約七八米の箇所に立ちたるも音のみにてさしたる事なかりき。返す返す負傷者を生ぜずして幸いなかりき。

4月7日（月）晴

総出演習日にして難路通過を実施す。幅約10米のクリークを裸となりて渡渉す。深約1米20釵、4月の水は未だ冷かなりき。

教訓

- （1）停滞せるクリークは幅に比し深さ浅し、流水クリークは割に深し。
- （2）一般歩兵の運動性は甚だ大なり。



蘇州附近の部落を流れるクリーク

4月8日（火）雨

17時半より中隊全員を連れ第二歌舞伎

「佛印進駐」、「昨日消えた男」を観る。欽縣市街焼けつく様な埃り道、木一本もない荒地総べて懐かしき風景だった。佛印の街ランソンの彼所に居りし頃が余程野戦らしかった。安南コンガイの特異な服装やランソンの教会塔等思い出は尽きず。

「昨日消えた男」は実際興味深くなり。帰途、自動車来たざる為部隊は散歩せしめ自らは「スズカケ」にて時を過ごせり。12時帰營。

コーシンの 笑顔懐かし ランソン城

4月9日（水）晴

余は大人物とならん。元帥たらん。之が為、宮本武蔵の武道に徹底せる如く、軍人に徹底せん。一切の他の欲望を放棄し、只管軍人皇軍将校たらん。鞏固なる意志を確立せんことを自らに誓う。現在吾人は隊務も甚だ不充分、自己節制も足らざる。甚だ怠惰なる人物なり。将器は然るべからず。必ずや今日只今より改め以て、古人、名将に下らざる者とならん。飽く迄自己の意思に対して誓う。

4月10日（木）晴

現在の調子を以てしては到底昨日の覚悟を達し得ず。昨日決心し本日は勤務をさぼりて映画を見んと外出するに於いておや。意志の薄弱なる斯くの如し。

ニュース映画撮影の為、残留人員を以て自転車部隊を編成し攻撃動作の撮影せり。攻撃に選定せられたる泉大尉殿の好意謝すべきなり。

7時（午後）より小田少尉、井垣少尉の自動車に便乗、八木少尉と共に、東和劇場に於いて「風雲将棋谷」「妻」を見る。面白きも前者中、大谷千代子の将棋谷の女主人珠美の如く十余年探し求めたる許嫁は他に心あり、自らは悪人に斬らるる如き、不幸の儘終われる人物を以て後味悪し。

「妻」は貞操を画ける物なるも奇合二回もある所、如何にも小説らしき心地す。

終わりにてより自動車の来る迄「スズカケ」にて待期す。

手紙を以て母に福引の礼左記二首を送る。

笑ふ部下 ひとりほほえむ 小隊長
髭面も 思わず照れる 赤てがら

4月11日(金) 晴

呂号演習より部隊帰る。唐津に於ける種々原案の話を聞くも留営間のんびりせる故なるかさして羨ましくもなし。

作戦近きに従い張切らざる吾人も逐次元気の旺溢し来たるを認む。本日の日夕点呼時の注意を与ふる声も思いなしか気合掛かりたり。(続き)

平成31年1月号 秩父 142号

諸隈中隊長戦陣日誌(前編) ④ 一大東亞戦争前

諸隈 良夫

陸軍航空士官学校

第7中隊 第3区隊長

目次

- A. まえがき
- B. 日支事変の推移
- C. 諸隈少尉第42聯隊赴任の経緯
- D. 諸隈中隊長戦陣日誌(前編)
 - 1. 陸士卒業と同時に出征(秩父139号)
 - 2. 諸隈少尉佐印の第42聯隊に着任(秩父140号)
 - 3. 師団再編成のため上海に移動
 - 4. 上海近郊の古戦場を周遊(秩父141号)

5. 浙東作戦参加 海門鎮攻撃

昭和16年4月15日(火) 晴

五時半兵営出発 新夕張丸に乗船、材料搭載陸上勤務将校。

13:00より熱田山丸支隊本部に於て作戦に関する命令下達。恰も図上作戦に於ける命令の如し。上陸点は海門鎮附近。背後より攻撃、佐々木危き所にて帰隊す。

4月16日(水)

上陸に関する大隊命令下達。余は上陸直後将校斥候となり二ヶ分隊の指揮、海門の敵出撃企図、偵察並上陸掩護、昼間艇隊航行訓練実施。

夜間実際の時刻21:30より崇明島の一部に対し上陸訓練敢行。翌朝四時帰船す。

4月17日(木)

集合点へ向ひ航行す。船中命令徹底並斥候要員を教育。



4月18日(金)

予定時刻碇泊、移乗す。操舵索脱し一時漂流せるもやがて舟艇航行に入る。

第一小隊の乗艇R508は発航後間もなく故障を生ぜるも小発、大発相互の曳航は兵力を減ずるを以て禁ぜられあり、やむなく後方に残置さるるを見る。河口に入るに従ひ、兩岸近迫、時折敵の射撃を聞くに至る。始めて弾丸の飛行音を聴く。第一発は割に近く砲弾の如く「ビューン」と頭上を過ぎたり。

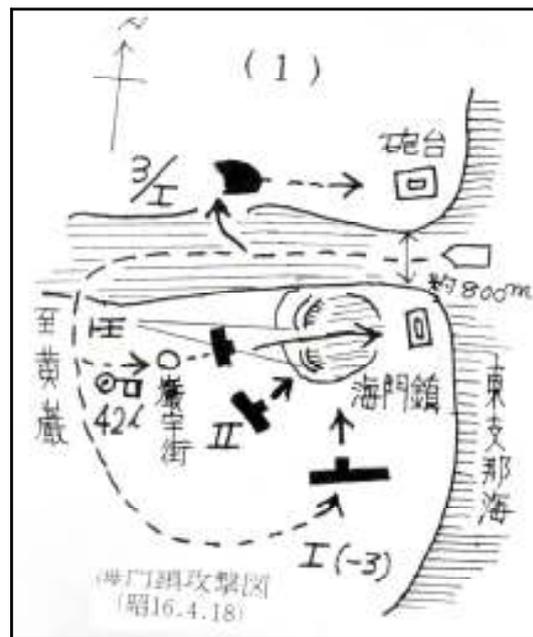
武者震ひに非ざるも胸のワクワクせるを感じ。上陸点附近に於て一時上流に過ぎ逆航して達着す。直にニヶ分隊(石田、伯野?1 [曲射歩兵砲 附)を畑中を蔽宇街東端に進出せり。途中クリークを飛びたる際拳銃安全装置を掛けざりし為サック内に

て妄発せり。

伯野分隊を以て道路上確保此の時支那兵一名自転車にて通行せるを以て捕獲、進藤上等兵に命じ刺殺する。

石田分隊を率ひ更に道路に沿ひ部落内約四百米前進路傍に支那将校二名、ただずめるを発見、袈裟斬りに斬りつけ一刀にて倒し得ず、悲鳴を上げて遁走せり。斬りたる勢余りて石畳に斬り付け切先に刃こぼれを生ず。此の間、斥候兵、支那兵と射撃を交換しありしを以て企図発覚、部落を脱し畑中に入り確保位置に帰る。暫くの後中隊主力、大隊本部到着、此の間将校二名、兵二名通行せるを以て捕獲刺殺す。

将校中佐1、兵1逃亡す。新しき兵なるを以て要領悪し。黎明と共に更に前進、十字路占領。



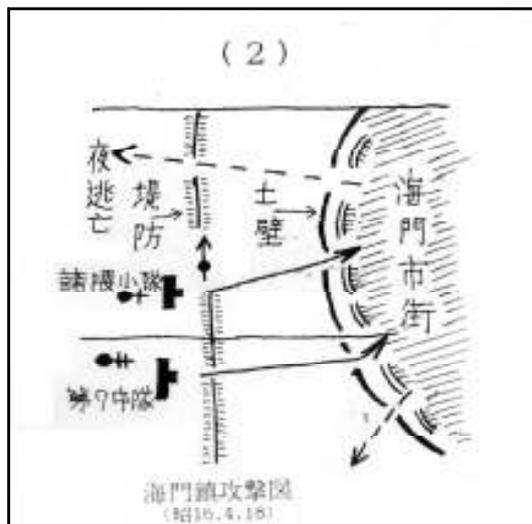
4月19日(土)

横より射たれ、後方にチエッコを聞く。

小隊長慌てざるを得ず。擲弾筒は甚だ便なり、且効果大。七時攻撃前進、部落に入り、路上を東方に前進、部落掃蕩ばかりは気持ちが悪し。先程迄射てる支那兵一名も見えず。東端高地に日の丸を立て朝食。

北岸上陸隊も対岸に日の丸を立つ。天気

はよし。朝風、此の上なく心地よし。迂回せるⅠ（第1大隊）は遅れて到達す。十時より物資搜索大してなし。木炭若干あるのみ。



十三時より黄巖に向ひ遡航の予定を徒歩に変更され、行軍前進、途中砲、MG（重機関銃）音を前方に聞く。軽装甲追尾し来るもクリークの為企画挫折、甚だ気の毒なり。

示されたる「前洋」に到るに、大隊は。既に前進、黄巖は一大隊により陥落しあり。黄巖前方一軒にて飯盒炊餐、二十一時半より石江に引返し台州進撃の為乗艇す。

4月20日(日)

進航途中前衛たるⅡ（第2大隊）は敵を攻撃の為左岸に上陸する。

中隊は支隊予備。朝九時半頃台州東方約五軒に上陸。朝食后支隊本部後方を前進、抵抗を受くる事なく台州入城。部落掃蕩

19:30、露営衛兵の命を受く。

21:00、配置完了、徹宵。

4月21日(月)

土民相互の掠奪盛んなり。十四時衛兵交代夕迄寝る。

4月22日(火)

夕刻七時集合、物資輸送艇護衛の為（7+1/4MG）下艇す。途中浅瀬にて座礁、翌朝迄（満水時）待機す。

4月23日(水)

眠りたる間に離洲下航す。十時頃海門着、積載しありし木材は昨夜座礁に際し総て放棄せし為直ちに上陸。

内田主計曹長を捉えサイダーを徴発す。背負袋を受領、再度台州に向ひ遡航す。

聊か初陣の所感を述べれば今次作戦は戦術上見地よりすれば概ね理想的なり。水陸両路を活用し十九日早朝奇襲上陸以来同日七時二十分海門占領。同日午后五里離れたる黄巖占領、夜間を利用、転進して台州を翌昼占領、まさに神速果敢なる進軍なり。

4月24日(木)

小隊の兵を使役に出し、午前中はウツラウツラ、十二時半集合、中隊は支隊予備となりて海門に直航と決定す。

十四時頃鹵獲船小蒸気に乗船す。後聞する所によれば兵の席は蚤の氾濫にて困却せし由なり。

出航百米にして擱座、二十二時の満水時を待つ。此の間当隊以外の諸隊を乗せたる舟艇は五時過ぎ総て下航し、残るは本船及護衛小艇一隻のみ。眼前の台州城には一兵も存在せず。兩岸には昼間の援蔭物資焼却の残り火未だ炎々。特に本船は多数の弾薬を積載しありて若し一岸より支那兵の発砲命中するあらば爆発の虞多大なり。正に二十二時出航に到る数刻心中平穩ならざる数刻なりき。

4月25日(金)

漸くにして出港せるも東の間約一時間半下航后六哩下流に於て再び擱座す。今回も遂に次回満水時十時を待つに決定す。掩護の立花小隊は北岸に上陸して掩護する。

天明と共に降雨、立花小隊は降雨中を腰迄つかって舟艇に乗り引き上ぐ。誠に気の毒千万なり。満水と共に下航恙なく海門に到る。船長堀軍曹の弟は第五十四期、堀たかひろとやら。同船の宮部に別を告げて宿舎に到り落ち着く暇もなく第三作業隊要員

として兵二十名を連れ埠頭に行きて物資運搬に任ず。但し遅かりし故を以て約一時間を以て許され五時過ぎ帰る。宿舎は七軒長屋の店舗にして余は東端、分隊毎東より一軒とす。加給品、糧秣分配あり、月桂冠一本、サイダー二本、菓子若干を受く(個人)。

4月26日(土)

午前速射砲中隊にて無駄話、昼食后辞す。午後、佐々木と共に海門市見物、西南角中学校内に防空壕ありて中の廣さは八畳程度、死骸三個あり。手榴弾にて掃蕩されたりと聞く。

佛国教会に隣接し北側に国民党支部あり。印刷機大一、小二を備ふ。内部に書籍多数、運動用具若干あり、復旦大学(上海にある総合大学)発行「亜細亜の内幕」中に

蔣委員長→民族大英雄

日本天皇→生物学者

甘地(ガンジー)→聖雄

伊朗(イラン)国王→万王之王

とあり、日本を書ける上巻見当たらず。

蔣中正(蒋介石のこと)「遊撃戦術」「歩兵操典」等多数あり。

海門東方高地、地図上砲台位置には砲台を認めず。爆撃は徒に家屋を破壊し、高地、海岸に大穴を開けたるのみ。

4月27日(日)

中学校を焼却しあるを以て現場に於て拳銃試射を実施す。

午後敬礼演習 終了后クリーク軽渡橋競争を班毎実施。

概ね九分四十秒より十二分前后、支那家屋の階梯を利用するを可とす。

中隊長、佐々木と夕食を共にす。

土民の帰来状況を見るに貧民大部分にして男女共廿代の者殆ど見えず。老人子供ばかりなり。姑娘等影だに見えず。

4月28日(月) 雨

十時半より兵器検査実施、国民党支部そ

の他抗日的建築物は本日焼却せらる。火焰轟々心地よき事限なし。

夜、桜井、川津、佐々木来り共に飲み語る。

北支に於い小学校、中学校、陸士共に同じく且同聯隊に赴任せる二名、時を同じくして戦死せる54期ありと、彼世に於ても共に進みあるべし。

4月29日(火)

聯隊副官、海岸偵察護衛として半個小隊を率い隨行す。帰途丸谷大尉最東端山上に砲門発見、伯野及兵二を上陸せしむるに果たして砲あり。丸谷大尉の好意により諸隈小隊占領したりと情報記録に乗せたるも、運搬を命ぜられ中隊兵員苦力を使用し本日には砲身砲架を山下に残置するに至る。

4月30日(水)

昨日の砲身砲架も網を多数準備するにより簡単に運搬せり。

前田中尉殿の所にて少時話す。

5月1日(木)

中隊は一時半集合 約4里南方路橋鎮を掃蕩す。材木商を二軒、小学校を二個焼きて帰途は舟を利用し帰る。

5月2日(金)

九時過ぎ出発 舟艇にて本船に引上げ。

5月3日(土)

残留せる他部隊も追及 上海に向ひ航行し完全に海門より撤退す。

5月4日(日)

正午過ぎ黄浦河口に到着、検疫を明日実施の為明日上陸に決す。

5月5日(月)

ふるさとほ 鯉泳ぐらむ 五月晴

検疫終了して午后帰營す。夜、上海外出。

5月6日(火)

軍紀教練、兵器検査実施。夜、大隊将校会食。(続く)

諸隈中隊長戦陣日誌（前編）⑤

一大東亞戦争前—

諸隈 良夫

陸軍航空士官学校

第7中隊 第3区隊長

目次

A.まえがき

B.日支事変の推移

C.諸隈少尉第42聯隊赴任の経緯

D.諸隈中隊長戦陣日誌（前編）

1.陸士卒業と同時に出征（秩父 139号）

2.諸隈少尉伝印の第42聯隊に着任（秩父 140号）

3.師団再編成のため上海に移動

4.上海近郊の古戦場を周遊（秩父 141号）

5.浙東作戦参加 海門鎮攻撃（秩父 142号）

6. 諸暨作戦参加

昭和16年5月7日(水)

三時過ぎ 聯隊は明朝出発 杭州南方諸暨附近の22D（第22師団）救援の為向ふべきことを告げらる。

十二時過ぎ、鉄道栈橋出発。鉄道により杭州に到り九時半杭州着 市内に宿営す。

5月8日(木)

市内見物。

5月9日(金)

自動車を以て国家巷?に前進、行軍を以て臨保鎮着、行軍路は堤防上にして約十米毎に高さ七・八十糎の土囊あり。阻絶の効大なり。

5月10日(土)

行軍を以て姚公埠に至る。泥濘路雨中にて十二時過ぎ到着。

5月11日(日)

十時頃姚公埠出発、十三時半頃 諸暨目

前蔣村に停止 分散宿営す。

明日より第一線に前進の由にて小隊の兵を集め訓示す。

二日半の食糧を持ち四日に喰う如く命ぜらる。



5月12日(月) 雨

途中支那兵の死骸あり、異臭プンプン。

午後目的地蔣鉄到着。数時間大休止。明日の食事を準備し、八時夜行軍を開始す。山間の狭き道にて困難を加う。特に重火器部隊の遅れること甚だし。

第七中隊は後尾なりし故我小隊は途中より重火器掩護に残置さる。其の時、歩兵砲と本隊の距離約五糎なり。

第五中隊は前方洞巖山に派遣せらる。

爾余の部隊は小兼溪部落附近に分宿し、明朝払暁を待つ。第四分隊位置にて伊藤、堀等と談笑しつつ火に暖まる。堀一等兵とうもろこしの粉を団子にし焼きて皆に喰わす。

5月13日(火) 終日小雨

終生忘るべからざる此の日は仮寝の夢を先ず銃声を以て破られたり。出でて四周を見れば山上総てに敵兵配置されしならん。

銃声は四周に起り相当激烈なり。第七中隊は直に右方稜線に沿って前進すべき命を受け一戦に加入す。稜線下の前進中前方より縦射せらる。生れて始めて敵弾の下を潜る。

一小隊二名、斉藤軍曹負傷す。部下を大隊予備に、二ヶ分隊重火器掩護に、二ヶ分隊出し伝令二名を連れたるのみなるを以て、のんびり戦鬪を觀察せり。

占領后転進するや直に敵出て来り、更に加えて背射せらる。陣蔭市？方面の河谷の見える峠に出ず、峠の50m前にて又敵より縦射せらるるも第一小隊の軽機機敏に射撃して駆逐す。

第一小隊右、第二小隊、MG（重機関銃隊）中央にて峠を確保す。右側方約七百の高地より屢々狙撃さる。福永右肩を負傷す。余が靴先五糶も離れず一弾落下せり。此の間先に第五中隊の先遣占領せし洞巖山方面にチエッコ銃声盛、且迫撃砲弾の落下するを見る。眼鏡を以て觀察するに高地上の友軍散兵後退するを見、状況急なるを見る中突撃の喊声聞えたり。此の間敵弾益々落下し到る所土柱立ち遂に友軍は瓦斯を使用せるを見る。

大隊命令により洞巖山に転進迫撃砲弾頻りに落下す。山上固守の態勢につかんとするに聯隊命令を以て我々の属せる第七中隊は前方敵の要点たる白壁高地を夜襲により奪取すべく命ぜらる。出発準備中、右翼に敵兵近迫せるを以て之に対応したる後、諸隈第二小隊先頭にて前進開始約百五十米附近より敵弾を被りつつ前進。友軍又敵に対応し被我の銃声盛なり。

行先に敵弾落ち岩を飛ばす。赤き閃光明瞭なり。

前方開闊し十字火あるを以て一時停止、中隊長より要図の如く攻撃を命ぜられ、月雲間より出んとするを見つつ遂に各個躍進を命じ、敵十字火の下を通過す。



熊丸、横山負傷、三好負傷、友軍軽機（三分隊）を以て前進に当たり敵軽機を制圧せしむ。

チエッコを持てる支那兵山を下りて横合いより射撃す。仲々勇敢なり。

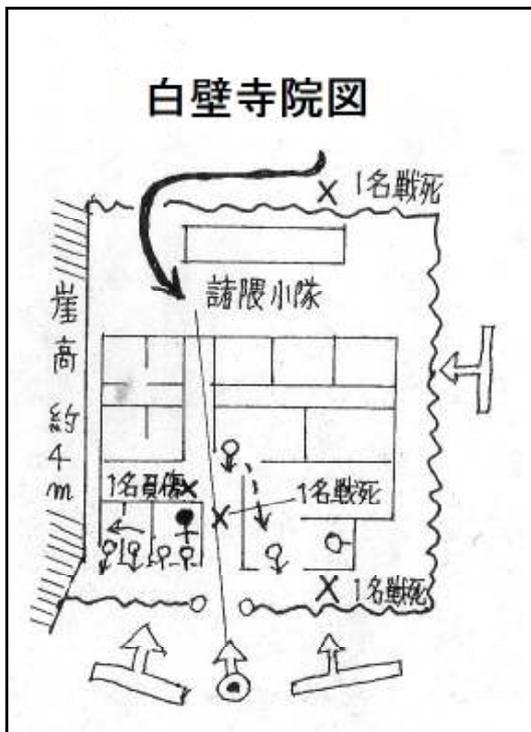
白壁寺院の敵陣直前にて暫く敵の手榴弾の投げ尽くすを待ったる後、小隊を集め小声の「一二三」を合図に一挙に突入す。敵兵は豪より飛び出でて逃走す。突入直後三十米右方の敵の機関銃射撃により兵一名両胸部を射たれ戦死す。自ら手榴弾を投げ突撃再開、稜線を走る。兵は乱戦の中にも「演習より面白い」と士気軒昂たり。

「小隊長より前に入るな」と分散を戒む。

白壁高地突入時の人員は九名なり。占領後の敵の逆襲激しく手榴弾を頻りに投擲せる為瓦斯弾を四方に投げ落し暫くにして手榴弾投擲距離外に駆逐し高地を維持するを得たり。伊藤戦死、堀口戦死。

心配したのは、中隊主力が未到着で、夜襲につきものの味方撃ちであった。それで

山端から大声で「中隊長殿！第二小隊が白壁の高地を占領しました！」と叫んだ。遙か下の方から中隊長の「おーい」と言う返事があった。この大きな声の報告は、洞巖山の味方まで聞こえたそうで、大隊本部は占領を知り喜んだ由である。



諸暨城に入城

5月14日(水)

翌朝敵退却しありし故直に撤退、大隊と共に進撃に移る。軍旗中隊となる。

5月15日(木)

昨夜より終日行軍。

進撃して大荘、楓山市に至るも敵を補足せず。諸暨、姚公埠、臨保鎮を経て杭州に帰還す。十三日昼間逆襲にて戦死五、負傷五（第三小隊）。

○聯隊本部付き 清郷工作作戦に参加

6月10日(火)

第七中隊小隊長を免ぜられ聯隊本部附となる。

6月29日(日)

早朝、江湾兵營出發、清郷工作参加の為蘇州を経て常熟に駐屯す。

聯隊本部、同直轄部隊第一大隊本部は在常熟、第二大隊本部は浒浦鎮に位置す。掃蕩剔扶及工作、宣撫を毎日部隊は実施す。

常熟は、寒山寺で有名な水の都、蘇州の東北の所にあり、上等な米の産地で江蘇省の商業の中心地として経済的にも豊かな都市である。これらの地区にいた敵は新四軍という共産軍と、蔣介石に忠誠を誓う忠義救国軍であったが、事前にいち早く地区外に退散していたので、わが方は交戦することなく分散配置についた。新四軍は、民衆を反清郷闘争に巻き込む指令を発し、執拗な抵抗を画策したが、聯隊は地区内に潜伏或いは遊動する敵性分子を肅清し、共産党地下組織の壊滅を図るなど治安回復と住民に対する宣撫に務めた。

9月17日(水)

聯隊長会議の為聯隊長不在。

工作情報は休刊日なるを以て何も為すことなし。稍々冷涼を覚え、正に燈火親しむべき候なり。

9月18日(木)

滿州事変十周年記念。

満州事変の手際良さに比べて今次事変の無計画性忍ばるる如き心地す。

国民の覚悟は比較にならざる如く好転せし如きも時局の重大性又一層比較の度に非ず。

清郷工作第二期、聯隊は江陰附近へ転進の予定なりと聯隊長殿より承る。我等作戦の為の移動を考慮しありし者の失望する所大なり。

第一期末は九月末日、第二期末は十二月末日の予定なりと。

9月24日(水)

第一期清郷工作进行し第二期江陰に移駐す。

9月30日(火)

25日～28日部隊主力を以て掃蕩を実施す。敵は全く存在せざるに電報班の多忙なること一方ならず。

古き頭の上官は電報通数の制限、起案の短縮等念頭に無く、徒に乱発するのみ。

一日平均発数四十通以上に上る。

班長たる小生、勿論、電報班、通信班等、毎夜、二時、四時頃迄作業す。

真の作戦に於いて赫々たる戦果を眺めつつなれば、徹夜も厭わず。倒るるも可なり。然れども敵無き討伐に於いて斯くの如きなれば大作戦に於ける状況察するに余りあり。

○中尉に進級

10月1日(水)

中尉に進級す。進級するも情報室勤務にてはさして嬉しからず。中隊附前任将校として敏腕を揮ひたき希望なりしも突如15日工藤中尉の後を追ひ第九中隊長代理に補される。

重任思うべし。我が歳未だ禁酒、禁煙の年なるに百数十の部下を率い教育内務の責任を負うとは。

聖恩の厚きに感激し、負托の重きを思い、一意専心任務に向ひ奮進あるのみ。

10月22日(水)

約四か月、只々多忙に終始せる清郷工作进行を本日をもって離脱し、上海に帰還す。如何に上級司令部が形式化、官僚化し統計事務に汲々とし、非能率的なるかを唯一の教訓として体得せり。

余をして言わしむれば清郷工作に上層の思う程成功し非ず。報告には美辞麗句を連ね常に良好々々と書きあるも実際に於て民衆は約八割迄迷惑を感じ、支那軍隊に反感を有するのみにて特に経済工作に於ては未だ一步の進展も見ず。

所詮現在の支那の官吏、軍隊を以てしては清郷は為し得られず。

○歩兵第42聯隊第9中隊長を拝命

11月10日(月)

正式に歩四二聯隊の中隊長を命ぜらる。

11月17日(月)

他人に見られざるを基とし赤裸々なる本心を発露し本日の日記を記さんとす。

我が家の特殊事情は熟知す。家の淋しき生活も知れり。然るに余は上海に於て若干遊蕩す。

矛盾は此処にも存在す。聯隊長の説法と行状より更に深刻なる矛盾なり。

然れども遊は遊、敵は敵、何とか屁理屈をこねて本日も「一力」へ赴かんと欲す。

E. おわりに

この陣中日誌の続は「諸隈中隊長戦陣日誌一マレー・シンガポール攻略作戦一」の題名で秩父119号(平成25年4月号)から秩父124号(平成26年7月号)に6回に分けて既に連載されている。

最初の119号は、「1. 開戦前夜」の見出して、昭和16年10月1日に中支の江陰にて陸軍中尉に進級するところから始まる。そして、大東亜戦争開戦前の11月18日に上海の呉淞港から鬼怒川丸に乗船、タイに向かって出港する。

諸隈中隊長戦陣日誌①

—マレー・シンガポール攻略作戦—

諸隈 良夫

陸軍航空士官学校
第7中隊
第3区隊長



陸軍航空士官学校第7中隊の諸隈良夫第3区隊長のマレー作戦時の戦陣日誌が美子夫人から提供されましたので、「秩父」誌上でご紹介いたします。

この日誌は昭和15年9月13日から昭和18年7月31日までが第1冊に、それ以後から昭和19年2月までが第2冊に記載されている。書き出しは昭和15年9月陸軍士官学校卒業して直ちに同月13日、横浜駅から出征するところから始まっている。そして宇品出航、黄埔上陸、広東を経て9月28日仏印進駐、歩兵第42聯隊速射砲中隊の小隊長としてランソン駐留、10月少尉に任官。11月15日船でランソン出港、海防経由で11月30日上海呉淞着。昭和16年4月浙東作戦で海門鎮攻撃、5月諸暨作戦参加、6月清郷工作作戦参加。10月中尉に昇進。11月歩兵第42聯隊第9中隊長を拝命する。12月にマレー・シンガポール攻略作戦に参加、昭和17年2月シンガポール陥落後マレー、シンガポール警備、12月ジャワ、アンボンを経てアラフラ海のタンニバル諸島のセラル島守備に赴任して約半年経った18年7月31日で第1冊は終わっている。

この日誌は、黒いラシャ地の表紙のB6判縦書きの罫線の入ったノートに文語体カナ漢字で認められている。

戦後、諸隈区隊長がこの日誌の中身を口語体ひらかな漢字で横書きにし、注等を補足書き足した戦陣日誌抄を作成しました。

「秩父」ではこの戦陣日誌抄に基づいて、昭和16年10月1日、中支江陰で陸軍中尉に昇進したところから掲載いたします。なお、読みやすいように編集氏が項目毎に見出し語を挿入すると共に、注等の書き足し部分は誌面の都合で一部割愛しました。この日誌は非常目次に長いので、4~5回に分けて連載いたします。(編集子)

目次

1. 開戦前夜
2. 開戦即タイ領テーパー上陸
3. タイ・マレー国境を通過
4. カンパルの戦闘
5. トロラク・スリムの戦闘
6. 負傷して後方病院に移送
7. シンガポール島攻撃一番乗り
8. シンガポール陥落
9. マレー・シンガポール警備
10. アラフラ海セラル島守備

1. 開戦前夜

昭和16年10月1日(水)

於中支江陰、陸軍中尉に進級。

10月15日(水)

第9中隊長代理を命ぜられる。若輩の身で百数十名の部下を率い、戦闘、教育、内務の責任を負うとは重任を思うべきである。一意専心任務に向かい邁進を誓う。

(注:前任の正式中隊長は工藤文雄中尉であったが工藤中尉の内地帰還后、江山晴康中尉が一時中隊長代理を勤めて居られた。安藤聯隊長は大東亜戦争の開戦に備えて若手の陸士出身53期3名、54期3名の計6名を一擧に中隊長に任用したもので、54期中隊長任命は全陸軍でも初めての事

であった筈である。同じ第5師団内の各聯隊でも同期生の54期で中隊長を命じられた者は全く無く、すべて小隊長が聯隊旗手の職にあり、開戦後聯隊に配属された戦車等の特殊部隊でも1年先輩の53期がすべて小隊長であった。）

10月22日（水）

約4か月間、ただただ多忙に終わった。清郷工作の聯隊本部勤務を離脱して上海に帰還した。如何に上級司令部が形式化、官僚化して統計的事務に汲々とし非能率的であるかを知ったことが唯一の教訓として体得された。

楊樹浦兵営で第9中隊に着任する。

（注：第9中隊には同期生の松元三男中尉が小隊長として勤務していたが、私と入れ替わりに聯隊旗手に転出した。松元中尉は後日マレー作戦中にカンバルの戦闘で戦死した53期倉田守中尉の後任として第11中隊長となるが、それまで第一線勤務から旗手になった事が心中面白くなく、戦闘中聯隊旗と共に第一線近くまで進出して聯隊長を慌てさせたこともある鹿児島出身の快男子であった。）

第9中隊に行くまで1年2か月の戦地勤務を経験していたが、速射砲中隊、第7中隊、聯隊本部等で第9中隊が所属する第3大隊には全く縁が無かったので馴染みもなく中隊の下士官は勿論私の顔を見るのは初めてで「何やら子供のような中隊長が来たでよ」と考えたであろうことは間違いない。当方も皆の視線を受けて「率先垂範」以外には何もないと覚悟を決めた。

11月10日（月）

正式に陸軍大臣から歩兵第42聯隊中隊長に補任される。中隊長代理から中隊長に昇格したわけである。

（注：この時点で次期作戦については中隊長クラスでも国境を突破して行う南方作戦準備の内示だけで作戦地目的等の内示は知

らされず、自転車で移動して一般戦闘を行う演習を上海郊外で繰り返していた。）

11月18日（火）

吳淞鉄道棧橋より鬼怒川丸に乗船する。

11月19日（水）

朝出港する。出港后、作戦地はマレー半島で、シンガポール攻略が目標であると知らされた。船中で各種の資料が配布された。

軍事秘密書類「英領馬來事情」、マレー・シンガポール航空写真地図、英軍編成表・兵器・軍用機の解説、マレー半島兵要地誌（朝枝軍参謀の現地偵察記録）、「これさえ読めばいくさは勝てる」（兵士全員に配布）等々である。

11月23日（日）

南支黄浦到着

11月25日（火）

海南島海口到着、高射砲等の特科部隊が乗船する。

11月26日（水）

海南島三亜口に終結する。

（注：海口から乗船した部隊の同期生から「一体どこへ行くのか」と聞かれて「出港したら教えるからそれまで待て」と答えた記憶がある。三亜口碇泊中に乗船「鬼怒川丸」から「長良丸」に第3大隊は移乗した。公判戦史とは船名が異なる。海南島海岸に舟艇による上陸演習を一度行った。大本營の御前会議で作戦実行の最終決定は12月3日であると聞かされていた。）

12月4日（木）

7時三亜口出港、2列の船団を組み一等巡洋艦が直衛し、水平線には駆逐艦が点望される。山下軍司令官の乗る陸軍特殊輸送船「MT」は城のような怪異な形をした船である。マレー半島上陸の「X日」は12月8日と決定された。師団主力は「シンゴラ」に聯隊主力は「パタニー」に第3大隊は「テーパー」に上陸の予定である。

仏印半島を通過したあとタイ湾を一旦北

上しタイ領土に向かうと見せ、反転して南下しマレー半島北岸に奇襲上陸の計画である。

12月6日(土)(X-2日)

未だに大隊長は上陸の部署が決定できない。従って中隊長はその任務、上陸部署を決定し得ない。大隊長小林少佐は神経質になり、大綱の把握が出来ず午前の言は午後変更する。今后、混戦時の戦闘指揮について不安を感じる。

敵潜水艦北上の情報に続いて前方に潜水艦発見との警報が出され、逐次情勢が緊迫する。今朝から輸送船の救助艇はすべて「タビット」から降下の態勢に変更された。午後空襲警報が出されたが敵機あらわれず。明日昼間は英軍機による空襲は必至と覚悟する。

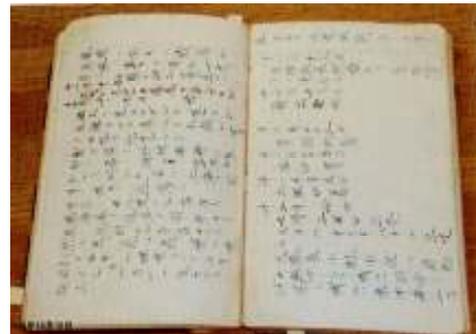
12月7日(日)(X-1日)

マレー半島上陸もいよいよ今夜に迫った。午後、英領「コタバル」に敵前上陸する第38師団佗美支隊の輸送船2隻、病院船1隻が分進する。英軍飛行場所在地に直接強襲上陸するのでは損害の大きさを思い気の毒に思った。14時師団主力の船団と分れて安藤支隊のみ「パタニー」方向に分進する。

早朝から敵の空襲に待機していたが、ついに攻撃を受けないまま日没となる。英国軍は我が船団の近づくのを未だ察知していないと推量される。したがってタイ領土にも侵入していないと考える。南進するにつれて季節風の波浪高まり船の動揺が増加する。さて、シンガポール要塞と呼ばれているが、先ず連想されるのは旅順攻略の戦史である。陣地戦の訓練、爆薬、火炎放射器等の装備が無いことに第一線指揮官として不安を持つが果たしてトーチカ等の堅固な陣地有るか無いかさっぱり判らない。



歴戦の面影を偲ばせる戦陣日誌



「コレヨリ大東亜戦争ナリ」

十一月十八日の頁

2. 開戦即タイ領テーパー上陸

12月8日(月) 晴X日 タイ領テーパー

予定より約1時間早く0時頃テーパー沖に到達投錨した。独立工兵と船員の訓練が不十分未熟で投錨后迅速に上陸用舟艇が降下しないので少々焦慮する。

中隊の舟艇移乗位置は風向に対し外側に当たるのか波浪が高く乗艇のもやい綱が2度切断して流された。ただし、全般としては昨日昼間の高波無く、本船の投錨前から月明皎々としてうねりを存するのみである。季節風により高波浪の本地方としてはまさに天佑である。舟艇航行に移れば動揺は殆ど感じられず、前方に陸岸の椰子林が眺見された。

陸岸から約100米手前で舟底が砂洲に触れたがそのまま通過して陸岸に到着して上陸する。予め打合せの居留日本人による懐中電灯の合図は無かった。上陸地点はテ

ーパー河河口左岸で、人の気配全く無く悠々と上陸した。

他の舟艇は岸から50米乃至150米付近に多く達着して首迄海につかって上陸する者が多い。海岸で隊伍を整へ土民の案内を探し、6時近く第12中隊を尖兵として「テーパー」に向い前進を開始する。座礁した舟艇の離脱作業援助のため第3小隊を残置する。前進路は砂地と湿地が多く進路不良で大隊砲その他重量物、材料を持つ部隊は著く遅延した。13時テーパー驛から約8軒西方の鉄道線路に進出できた。炎熱下の行軍で兵士の疲労が大である。以後、遅延部隊を終結して第12中隊が占領した列車を利用し夜遅くテーパー驛に到着、列車内で宿営する。

飛行場大隊長以下の一行は更に東の「ターパー」飛行場予定地付近まで前進した模様である。

記念すべきマレー半島上陸の第1日はついに1発の銃声も聞かずに暮れたが、とにかく疲れて第12中隊の同期生田代中尉と共に狭い座席で折り重なるように眠った。

12月9日(火) X+1日 テーパー

本日はテーパー驛で中隊主力は休養、第3小隊のみを連絡の為「ヤラー」に派遣した。

(注：上陸前の聯隊命令では「X+2日」12月10日に第3大隊はヤラーに集結の命令を受けていた。)

夕刻帰来した第3小隊長古屋少尉の報告は次の通り。

- ・12月8日米国、英国対して宣戦が布告された。
- ・マレー上陸と同時にフィリピン、ハワイ等に一齐に航空機による爆撃が行われた。
- ・パタニーに上陸した聯隊主力は12月8日6時30分、タイ陸軍と衝突し、戦死20負傷40(内将校堀田少尉重傷)という

予想外の損害を受けた。部隊の先頭は本日12月9日ヤラーを通過して進撃中であるが、道路不良のため一挙進撃が意の如くならぬ模様である。

・シンゴラ方面の師団主力もタイ国軍及び警察と衝突の後、ハジャイを通過、英領マレーとの国境を突破の由。佗美支隊(コタバル上陸)方面は天明と共に敵機の爆撃を受け輸送船1隻沈没、1隻大破。

上陸以来、我が部隊方面に全く敵機を見ない。予想に反して英国空軍の活動が無い。第1日に大挙空襲した友軍機の航空撃滅戦の成功と考えられる。



12月10日(水) X+2日 テーパー

師団命令に基く聯隊命令を受領。

1. 第9中隊(第2小隊欠)は当分の間テーパーに残留しテーパー飛行場の掩護に任ずべし。

2. 第9中隊第2小隊は大隊本部直轄に差し出し輸送の任に当たるべし。

テーパーの飛行場大隊長のもとに挨拶に行き、中隊の部署は1ヶ小隊をテーパー駅、中隊主力はテーパー駅に配置と決定する。

飛行場予定地はテーパー駅北方約6軒の草原で飛行機の着陸は可能の由であるが駅から道路不良で自動車の通行は不能の為、燃料、整備資材の集積には相当の時日が必要である。

12月11日(木) テーパー

10時過ぎ出発、ヤラーに行く。大隊主力は未だヤラーに在り、各種の自動車を徴発収集して百鬼夜行の様で出発準備を行っている。15時頃テーパーに帰り、再び大島少尉の指揮で列車をヤラーに向けて出発させる。明日から小隊長を交互に列車長として服務させないと通過する各隊の整理が困難である。

12月12日(金) コークポー

給食その他に関し連絡の為パタニーに行く。第10中隊長白石中尉以下、在パタニー部隊は兵站業務で頗る多忙の様子である。

各方面のニュースを聞き栈橋を視察する。白石隊の自動車でコークポー驛まで戻ったが、テーパー方面行き最終列車出発後であったため、コークポー驛に泊まる。

ハワイ、フィリピン、その他各方面に対する攻撃は順調に進捗している様子で、既に英国極東艦隊の主力は撃沈したと聞く。聯隊主力方面は昨朝自動車約100輛の英国軍がタイ領に出撃の情報があるが、詳細不明。12月8日のパタニーの戦闘で第8中隊渡辺少尉負傷の由。

12月13日(土) テーパー

コークポー驛から列車でヤラーに行く。岡本小隊は自動車の集結を終わり、出発準備中であった。自動車を借りベトン道を旧ヤラー市迄往復してその間の状況を視察する。コークポー、パタニー間の道路と違い泥濘路で極めて悪い。夕刻、テーパーに帰る。本日から列車の運転は鉄道聯隊で実施となる。タイ国人鉄道関係者と会食する。

12月14日(日) 雨 テーパー

終日降雨 無聊に苦しむ。聯隊主力は国境を突破した由で先ずは一安心である。我が中隊は目下は遊兵である。兵士も退屈して皆声を合せて何やら歌っている。

12月15日(月) テーパー

在テーパーの第3小隊と第1小隊の交代を命ずる。

帰来した古屋少尉の報告によれば、飛行場大隊長以下約半数は昨夜突然命を受けて今朝コタバルに転進したという。テーパー飛行場は12月8日重爆3機が着陸したものの1機が転覆する等地盤軟弱のため飛行場としては不適當の由である。高射砲聯隊長以下もテーパー驛で以後の行動の指示なく困惑しているとのこと。テーパーのタイ警察署長が友軍機の不時着を報告に来る。持参した紙片は操縦士石塚曹長の書いたもので。単座戦闘機でテーパーより徒歩約8時間の地点に不時着した由である。救援を派遣しようとしたが署長が言うのに目下テーパーに向かいつつあるし「ネバーマインド」を繰り返すので取りあえず石塚曹長に一筆書いて携行させた。

第9中隊の今後の行動について駅の鉄道聯隊配属無線機を通じて聯隊長宛に照会電報を発信する。

情報によれば、12月12日 パタニー沖で敵潜水艦の雷撃によって、阿蘇山丸沈没擱坐、東山丸、金華丸大きな損害を受けたという。吾々を運んだ長良丸は約30分

前に出港して難を免れたとは運の強い船である。

12月16日(火) 晴 テーパー

雨天続きの処、久方の晴天である。古屋少尉、今橋曹長を連絡のためヤラーに派遣する。午前中、テーパー部落の官吏数人が中隊を訪れ、食料(椰子ノ實、バナナ、焼鳥、鶏等)多量持参、進呈する。有難く受領して礼を述べて帰す。

不時着機の石塚曹長到着、顔面を負傷しているが元気で手当を受けたあとシンゴラ方面行きの列車に搭乘させる。

午後、東方鉄橋付近の森林に行き鳥を射つ。石丸が大きな猿を射ち落した。

テーパー警察署長の大尉氏が娘2名を連れて訪れる。タイ国人にしては色白で無骨な父親に似ないの美人である。日本語を若干教授して帰せり。

12月17日(水) 晴 テーパー

飛行場大隊は続々引き上げ移動する。16時の列車で三好軍曹以下数名を糧秣受領のためパタニーに派遣する。

12月18日(木) 晴 テーパー

早朝4時出発命令を受領する。糧秣受領に随行した松前上等兵がコークボーから携行したものである。聯隊命令に添附された中村聯隊副官の手紙によって同期生第2機関銃中隊長和田醇中尉の戦死を知る。「聯隊主力は上陸戦闘の後、ベートン北方33料に於て始めて出撃し来れる英国軍と交戦し、2日間に亘る激戦の後、敗走する敵を急追して進撃せるに、12月13日夜間ベートン北方13料に於て敵の集中砲撃を被り、彼の優秀青年将校和田中尉は国境戦の華と散り護国の神と相成り云々」昭和13年山口の隊付以来の友5名の内、1名を遂に失った。戦死は厳粛崇高なものであるが、同期生の戦死は特に慟然とさせられる。

連絡の為パタニーに往復する。我が中隊は明日ヤラーに前進と決定する。

パタニー往復途中においても車中常に和田の事念頭にあり、思ひ出は盡きない。

なき友を想ひてうるむ眼尻を
風にと見せて車行くなり



マレー半島には椰子林の間にポコット飛び出た
小さな山があちこちに点在する
(次号に続く)

平成25年7月号 秩父120号

諸隈中隊長戦陣日誌②

—マレー・シンガポール攻略作戦—

諸隈 良夫

陸軍航空士官学校
第7中隊
第3区隊長

(マレー戦線にて→)



目次

- 1.開戦前夜 (秩父119号掲載)
- 2.開戦即タイ領テーパー上陸(秩父119号)
- 3.タイ・マレー国境を通過
- 4.カンパルの戦闘
- 5.トロラク・スリムの戦闘

- 6.負傷して後方病院に移送
- 7.シンガポール島攻撃一番乗り
- 8.シンガポール陥落
- 9.マレー・シンガポール警備
- 10.アラフラ海セラル島守備

3. タイ・マレー国境を通過

12月19日(金) ヤラー

朝より移動準備を完了したるもヤラー方面の列車仲々来ず。18時漸く出発する。出発時テーパー警察の警官約20名程、整列拝銃にて吾々を見送る。署長より昔母より貰いたると称する「ブダ」と言う御守を頂戴する。驛長よりはマラリア予防薬を頂く。

テーパーはタイ南部の一寒村で戸数約30戸に過ぎないが、人々は真に純朴で僅か10日間の駐留であったが、日本軍によく好意を示してくれた。

ターパー駅で大島小隊を収容してヤラーに到着、宿営する。

12月20日(土) ヤラー

終日ヤラーで出発準備。散髪する。

12月21日(日) ヤラー

明朝、補給物資積載の自動車29車輛を指揮して出発と決定。第1日の到着予定はベートンであるが道路不良のため途中宿営になるかも判らない。兎に角待望の前進である。漸く国境を越えるに至りしは喜びに堪えない。

12月22日(月) 晴 ベートン

9時40分ヤラーを出発、ピンナンサターの渡しを越えてから約1時間半の行程までは順調に進んだが、以後は道路の不良と加うるに英軍の橋梁爆破のため遅々として進まず、23日朝6時過ぎ、ベートンに到着した。

英国軍は国境から約35～36軒の地点迄前進して逐次抵抗しながら後退した模様

で、33軒の地点の道路屈曲部には敵味方の工事の跡あり、敵のブレンガンキャリヤ3台、その他と遺棄死体が点々と残されていた。

ベートン北方約13軒の地点では道路が爆破され友軍の工事の跡を認めた。その後さらに軽戦車、ブレンガンキャリヤ2台等が残置されており、軽戦車の操縦席には敵兵が坐ったまま戦死していた。和田中尉の戦死の場所は夜間のため確認出来ず、残念であった。ベートンに至る迄の間に徴発車輛の遺棄せられたるもの約50台があり、泥濘のためクラッチ滑りによる故障と判断する。

12月23日(火) 晴 ベートン

12時過ぎ起床。15時、翌朝の出発命令を下達する。今朝までの20時間以上の難行軍を考えて、本日は整備を命じ前進は中止と決める。命令下達後、ベートンの野戦病院分院を訪れた処、55期朝枝少尉と第3中隊岩本少尉が負傷入院しているのを見つけた。朝枝少尉は両腕に貫通、盲貫計3発の銃創を受けていた。初めて国境に至る戦闘の状況、和田中尉の戦死事情等を詳しく聞くことが出来た。英軍の迫撃砲集中射撃は相当熾烈であることを知る。

12月24日(水) バンガーレンダン

9時30分ベートン出発。タイ・マレー国境を通過する。若干の距離を置いて両国の税関らしい建物があつた。引き続いて敵の道路破壊があり、両側の山腹には多数の陣地構築の工事が見られる。弾薬、火炎瓶等多数が残置されており、この国境陣地で敵が抵抗したならば突破には友軍に相当の損害を出したはずと予想されるが敵は聯隊主力の急追で戦わず退却した。道路爆破用にドラム缶位の大きさのマンホールが路面中央に50米置きに埋設されているのを見受ける。

16時クローに集結完了。三叉路に立つ

て進路の決定を考慮する。左方の聯隊の進路グリーク道は泥濘の悪路で「後続車両部隊は西方に迂回すべし」との告示板があり、残留兵士の言葉もあり、道路良好な西海岸に向かうことに決心する。

クローよりバリンドを進み小部落バンガーレンダンに宿営する。

12月25日(木) セダン

10時出発、バリンを経てクリム手前1哩セラマ道との分岐点まで前進して昼食を命じ、その間に先行してクリムに行き、上木部隊(輜重)糧秣交付所の将校に状況を聞く。予想に反して師団の先頭は今度クアラカンサルに在り、戦闘司令部はタイピンに在ることが判る。

セラマ、タイピンを経てクアラカンサル前方から聯隊に追及することに決めて、セラマ道を前進し、16時セダンに宿営する。本日は道路良好で1日の行程約100軒強である。聯隊はペラク河上流で相当戦果を収めつつあると聞いたが、我が中隊は今だ遊兵である。

12月26日(金)タイピン

9時30分出発。先行してセラマ経由、タイピンに行き、師団司令部に出頭する。山中参謀に会うと「聯隊の位置と現在地の間には敵が居り貴官の判断にまかせる」との発言があった。「それでは中隊を率い敵中を突破して聯隊に合流する」と回答したが、結局、第2梯団の後方を続行と指示された。中隊の到着が遅れて先に到達していた聯隊の補整隊の近くでタイピン宿泊。

12月27日(土) ペラク河プランジャー渡河点

9時タイピン出発。ツロンから第1梯団の後方を前進する。本日聯隊主力はマノンに進出してきたので、19時全車両を率いてマノンで聯隊に到着して任務を完了する。第3大隊主力は未到着で第9中隊は聯隊直轄となり、23時30分マノン出発、

ペラク河渡河点に前進する。聯隊徒歩部隊の渡河係将校を命じられたので、下士官4名を連れて先行してプランジャー渡河点に行き工兵隊と連絡して終夜、渡河部隊の区処に任ずる。

12月28日(日) バッカジャー

10時15分 全徒歩部隊の渡河が完了する。中隊を率いて徒歩行軍により聯隊に追及してシプテーで大休止。自転車、自動車の徴発を行い、24時バッカジャーに前進、宿営する。

12月29日(月) コタバル

中隊の徒歩部隊を第8中隊長古谷大尉の指揮下に入れて自転車部隊のみを連れてゴベン西方の三叉路に前進する。第3大隊本部と岡本少尉以下の第2小隊が追及して来て合同する。聯隊長命令で第9中隊は速射砲1門と第2大隊の機関銃2ヶ小隊、大隊砲1門を配属されてゴベンコターバル道路上の残敵掃蕩を命ぜられる。

比較的強力な編成であるから直ちに勇んで出発しようとした処、大隊長の申し出で大隊長指揮に変更される。地図が古く予定の進路が無く、翌朝5時コターバルに進出したが敵影無し。

12月30日(火) ゴベン

聯隊本部から電報指示受領。10時40分コターバル出発ゴベンに向かう。途中で自動車が迎えに来て3往復でゴベンに集結を終わる。

東南方で昨夜から砲声が依然として続く。河村部隊(第9旅団)前面の敵はカンボンクアラディペン附近と東方山地の陣地によって砲兵の十字火を利用して頑強に抵抗を実施中である。

第2大隊(1ヶ中隊欠)は敵の背後攻撃のため転進してバッカジャーから南下し、自動車道路の終点からスングエイキンタ河を舟艇によって下航、敵の左側背攻撃を命ぜられる。第1大隊は相当の損害を受けなが

ら河村部隊の戦闘に協力した後、目下ゴベンに集結中である。24時近く第11中隊到着する。

12月31日（水）

ゴベンからカンボンクアラディペン橋梁を通過して約500米山側に前進する。河村部隊の攻撃は敵の猛烈な砲撃に阻止されて進展しないが、カンパルが陥落すれば安藤部隊が超越して第一線となり、第9中隊は尖兵中隊を命ぜられる予定である。22時頃、初めて敵の長距離射程砲弾が我々の頭上を越えて後方500米の渡河点附近に落下する。以後時々砲撃を受ける。

紀元2601年の最終日は路側の椅子に腰をかけて敵の砲撃を除夜の鐘と聞きながら有意義な終末を告げようとしている。

昭和16年の1年を回顧すれば、南京城頭で1年の武運を祈って以来、神は我が願いを容れて、4月浙東上陸作戦、5月諸暨作戦、7月から10月末まで清郷工作、11月出航の今次作戦と野戦の経験を重ねた。南方遙かに歩を進めてマレーの地で英米勢力駆逐の戦の真只中に身を置くとは、男児たるもの「快なり」と言わざるを得ない。

4. カンパルの戦闘

昭和17年1月1日（木）

大東亜戦争の緒戦の内に紀元2602年を迎える。0時30分 中隊全員整列して皇居遥拝を行う。その後、出発準備を整えたまま道路上で仮眠する。夜明けと共に約1500米前進して路傍のゴム林内に入り大隊が分散して休憩する。

正午近く突然至近距離に敵砲弾約20発落下炸裂する。中隊を連れて約800米後退して安全な遮蔽下の山陰に移動する。（注：「大東亜戦争」の呼び方が記入されているが、いつから使い始めたか記憶が定か

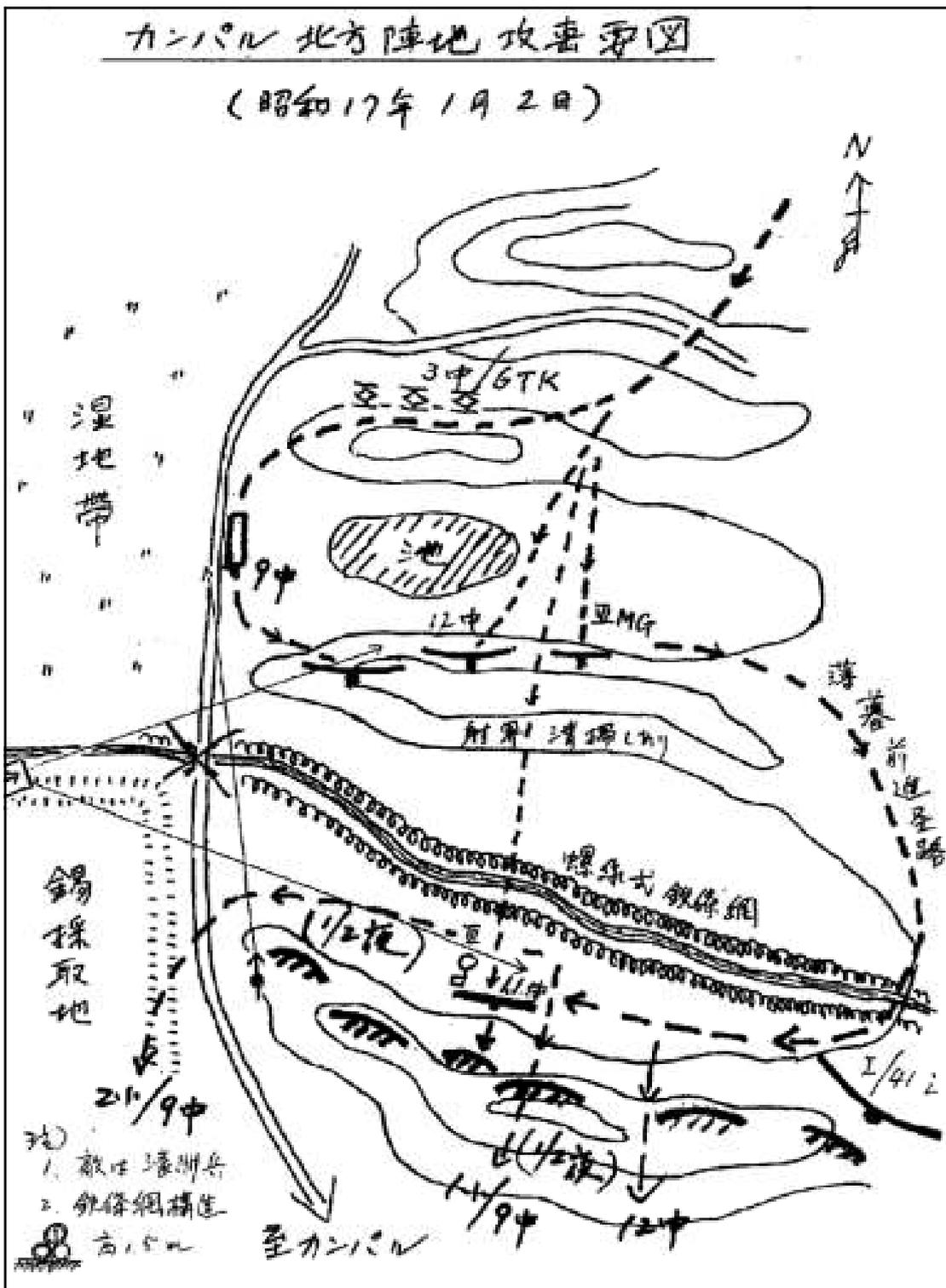
はない。）

1月2日（金）

2時過ぎカンパル攻略の夜襲命令が下り、第9中隊は尖兵中隊として戦車と共に突進を命ぜられる。中隊全員に訓示を与えたあと、道路上を約1000米前進して第一線まで出たが、大隊長の命令で一たん400米後退する

（注1：訓示の要旨は「第9中隊として第1回の戦闘であるが中隊長は戦闘に関して経験と自信があるから中隊全員、自分に命を預けてついてくれば、損害は少なくして勝利を得ることが出来る」と述べている。戦闘直前のこの訓示は中隊の兵士に強い印象を与えることが戦後の戦友会で回想されている。）

敵陣地直前の橋梁は爆破されたまま未修理で戦車の前進は不可能と判明する。



諸隈中隊長手書きの陣地攻撃要図

(9中は諸隈中隊を示す)

結局、第3大隊の歩兵独力で敵を攻撃することに決まる。大隊配備の戦車第6聯隊第3中隊と打合せを行った時、53期で42聯隊士官候補生出身の山崎中尉、54期

で陸士予科同区隊の指宿中尉に会う。隠密裏に前進したが橋梁前で黎明となり敵の集中射撃が開始され、予め大隊長から受けた指示に従って第9中隊を道路左側の高地に

移動させて前進を停止する。第9中隊より左側に展開して前進中の第11中隊および大隊本部は引き続き前進を続けて道路左側の高地を越えて敵側斜面を下る時、天明となって敵の集中射撃を受け、第11中隊の半数と大隊本部は河の前方の敵陣地高地麓まで取りついて攻撃を続行したが、兵力の少数と敵側防火器の射撃によって突撃成功せず、中隊長倉田守中尉、小隊長安達敏太少尉その他が戦死。以後、第11中隊の残部および大隊本部は攻撃反復の余力が無く高地の脚部に固着した。

第9中隊、第12中隊、機関銃中隊は手前の高地に在って斜面に壕を掘り敵砲弾の被害を避ける。敵の砲撃の合間を見て、第3機関銃中隊長安川大尉、第12中隊長田代中尉と共に高地頂上に出て前方の敵陣地を双眼鏡で視察するが、敵味方の第一線位置の識別が出来ず、また当方が立姿であるのに狙撃を受けない。6号無線機を使用して大隊本部と連絡を行い、左方の密林を迂回して前進することを大隊長に数回申し入れたが現在地で日没を待てと命令される。

12時頃、野砲聯隊第3大隊長中村少佐が我々の高地に来て、小林大隊本部と無線で連絡しながら前方の敵陣地を山砲で射撃する。敵砲兵も激しい砲撃を繰返し試みに数えると1分間50数発であったが、頂上附近で炸裂する以外は頭上2米を通過して麓で炸裂し、終日砲撃を喰ったが、中隊の斜面には一発も落下しない。友軍戦車が時々道路上に出て敵陣地を砲撃する。右前方堤防上の敵機関銃の射撃によって、国重、堀負傷する。重機関銃で応射して掩蓋陣地を炎上させる。薄暮に前進を開始して左前方密林を迂回して前方の山脚に進む。銃声が絶えたため敵の退却を予想しながら大隊本部位置に着いて、初めて第11中隊の情況等を詳しく聞く。

岡本小隊を道路右側堤防上に派遣して所

在の敵の攻撃と大隊の援護を命ずる。22時30分道路上に出て岡本小隊からの伝令、深町上等兵の報告を受けている時、左側の林の中から突然手榴弾攻撃を受けて、深町と共に負傷する。右肩と右大腿部破片創で微傷である。直ちに大島小隊を以て附近の敵の掃討を命じた処、予想外の多数の敵の抵抗を受けて北山伍長戦死、西浦重傷を負う。岡本小隊前面の敵は自動車で退却して対戦車砲1、軽機1、自動小銃若干を鹵獲した。

1月3日(土)

第3大隊が前方の山の敵を攻撃中に橋梁を補修して戦車が通過前進を始める。

2時30分、戦車を先頭に第12中隊尖兵となり進撃を開始する。静まり返ったカンパル市街をたちまちの内に通過してカンパル南方8軒に進出する。迂回した第2大隊が西方から進出して戦闘中である。この戦闘で戦車第6聯隊第3中隊の54期熊本中尉戦死。指宿中尉と共に戦死の地に手向の花を供える。聯隊予備隊を命ぜられてシンバンチカルム南方1軒の橋梁附近で宿営する。

1月4日(日)

タバーに於いて大隊に復帰、自転車の微発を実施する。タバー橋梁は完全に破壊されて戦車隊は再び歩兵と分離する。ピドルまで前進して宿営する。

1月5日(月)

8時ピドル出発。中隊は大隊より先行してスンカイまで前進する。スンカイ南方3軒の隘路内に敵陣地があり大隊前進中止。スンカイ南方にて宿営する。

(次号に続く)

諸隈中隊長戦陣日誌③

—マレー・シンガポール攻略作戦—

諸隈 良夫

陸軍航空士官学校

第7中隊

第3区隊長

(マレー戦線にて→)



目次

- 1.開戦前夜 (秩父 119 号掲載)
- 2.開戦即タイ領テーパー上陸(秩父 119 号)
- 3.タイ・マレー国境を通過(秩父 120 号)
- 4.カンパルの戦闘 (秩父 120 号)
- 5.トロラク・スリムの戦闘
- 6.負傷して後方病院に移送
- 7.シンガポール島攻撃一番乗り
- 8.シンガポール陥落
- 9.マレー・シンガポール警備
- 10.アラフラ海セラル島守備

5. トロラク・スリムの戦闘

1月6日(火)

第3大隊は第一線を超越して前進を命ぜられる。第9中隊は尖兵中隊に起用される予定で16時出発、第一線近くまで前進する。第一線の状況は西側密林の隘路の直線路上にコンクリート製ドラム缶状の対戦車障害物が設置されており、続いて鉄条網が道路上を閉塞している。敵の兵力は不明であるが地図で判断すると長い隘路で相当な縦深陣地の存在が予想される。敵陣地直前は約千米位の直線道路で敵の標定砲撃を受ける。第1大隊第1中隊は敵陣地の手前約600米に固着しており第1大隊主力は左方、第2大隊は右方に両側密林内を迂回中

である。

明朝5時、工兵(大島小隊)によって障害物を爆破した後第9中隊は戦車第6聯隊の島田少佐の指揮する戦車2ヶ中隊24両と共に突進して、前方陣地の縦深突破を命ぜられる。戦車隊と細部協定の後、中隊は明朝3時30分行動開始、戦車より先行して敵陣地直前に前進することに決定する。配属された工兵小隊、無線分隊を併せて概ね戦車1両に1ヶ分隊宛随伴の割当を命令する。縦深な敵陣地の攻撃であるから負傷者の処置について敵第一線陣地までの負傷者は後退させそれ以後の負傷者は手段を尽くして同行するように指示する。戦車尖兵長は同期生渡辺定信中尉である。健闘を誓う。

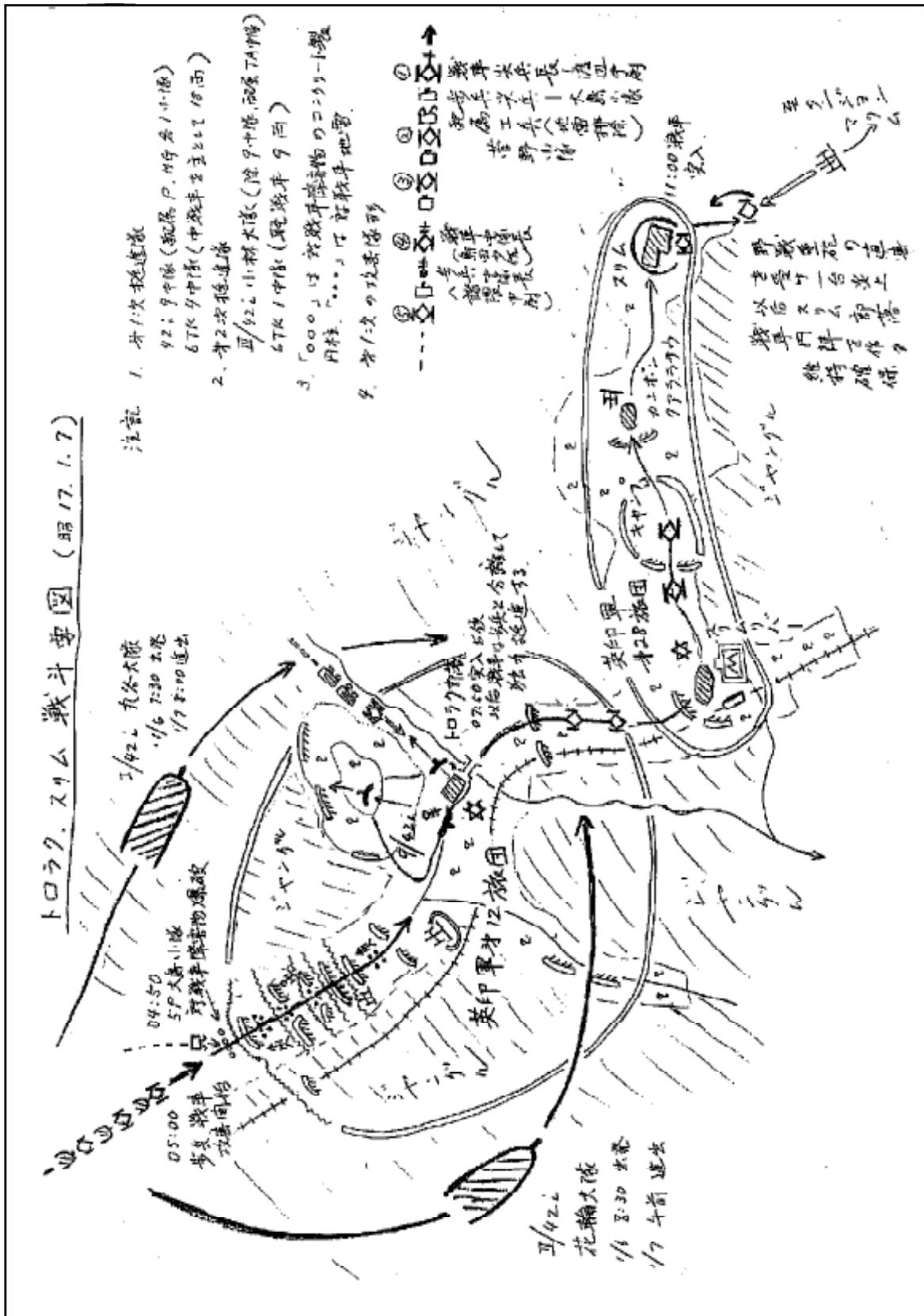
1月7日(火)

3時30分予定の如く出発、旧道を経て新道上の敵第一線手前約千米の横合に先ず進出する。4時50分頃、隠密に潜行した工兵が対戦車障害物を爆破してバラバラと駈けて戻る。裸足で短剣のみで武装した工兵は爆破后、敵兵に追われた由である。

5時5分、戦車がー列縦隊で前進してくる。戦車中隊長島田少佐から戦車両数が半数となったと告げられたが既に駈足で戦車と共に敵前を走行中で後方の小隊に命令変更を伝達する余裕が無い。

対戦車地雷排除のために配属工兵を第1小隊と共に前方戦車に随伴させ、他は1ヶ分隊毎戦車の後方に入り中隊長は第1小隊長大島少尉と共に第4番目戦車中隊長車の後方を前進する。敵陣地直前の対戦車障害物の附近から敵味方共に射撃を開始して、鉄条網を突破して敵第一線陣地に突入する。中隊指揮班の豊嶋軍曹負傷、尾木上等兵をつけて後退を指示する。戦車は敵陣地に突入后、道路上に縦列停止してエンジンを切り前方西側の敵を戦車砲、車載機関銃で猛射する。歩兵は戦車両側の路傍に伏せ

て敵の肉薄攻撃に備えて待機する。



諸陣中隊手書きの戦闘要図

顔を上げて様子をうかがうと味方戦車の射撃と敵の機関銃、対戦車砲、迫撃砲等各種の曳光弾が飛び交い炸裂し凄まじい有様で赤色の火炎のトンネル内に位置する如き心地である。敵第一線の地形は切通して道路面が低く両側に高さ2米位の敵の工事陣地が続き道路上を鉄条網で閉塞して両側から路上を射ち下し縦射する。歩戦協同の強行夜襲でなければ突破し得ない強固な陣地である。50耗戦車砲が20度くらいの仰角で射撃すると至近距離で10米も離れず敵陣地頭上の樹林に当たり炸裂することを繰り返す。戦車の威力は甚大で5分乃至10分で周辺の敵を制圧沈黙させる。敵の手榴弾投擲は予想外に少ない。戦車は停止した時にその都度エンジンを切るために敵味方の射撃が一瞬停止した時、奇妙な静寂が闇を支配する。戦車兵が戦車の内から外の歩兵に敵兵の方向を聞く叫び声が良く聞きとれる瞬間である。戦車のエンジン整備は良好で再スタートは一発で始動して前進を開始する。以後、100米位前進しては停止して両側の敵の制圧を繰り返す。道路上の地雷は戦車の援護射撃の下に工兵が排除に努めるが、地雷を踏んだ戦車の底板が轟音と共に炎に包まれるのを見る。幸いキャタピラー切れずに引き続き前進する。負傷者の声を逐次聞く。自分も左腰に負傷したが、歩行に差支えない。敵陣地突入后路側の溝の中の敵通信線を軍刀で切断する。配属無線通信兵の小銃が戦車に踏まれて砕けるのを見る。とかく徒歩兵は弾雨の中で戦車によりそって伏せるが、戦車に命中する敵の跳弾が極めて危険なので離れる様に指示する。

先頭戦車は鉄条網が絡み付き行動不能となり、戦車尖兵長渡辺中尉は次の戦車に移乗する。鉄条網を持つ敵陣地5線、その他の陣地2線の縦深陣地を約1時間半で突破する。この間前方からオートバイに乗った

英国兵が戦車の横を疾走して来て后方で刺殺される。また、后方から英軍トラックが全速力で戦車を追越し逃走したが先頭戦車に砲撃されて路傍に停止した。

払暁時、第一目標の第一線後方約4軒の三叉路に進出する。同地を確保して主力の到着を待つつもりであったが、右方向遙かに銃声盛であるのを聞き、第2大隊の進出を予想して更に2軒前進してトロラク部落附近に進出する。戦車隊長島田少佐から「先頭戦車は既に前方部落トロラクの先端まで進出している。歩兵独力で安全に進出出来ると思うから、戦車は分離して更に前進する」と告げられて戦車と離れて中隊を集結しながら前進する。第2小隊以下は遅れて、第1小隊、中隊指揮班のみを掌握する。左方の高地に敵兵が居り、友軍の軽機関銃の音が聞こえたので、敵の側背から攻撃の目的で第1小隊に攻撃を命ずる。路傍の藪中にも残敵数名居り射殺する。約40分后、軽戦車中隊が前進して来て続いて第12中隊を尖兵として大隊主力が到着する。

第1小隊は戦死1名（石丸雅亮）、重傷2名（仁王頭、網広）の損害を受けたが高地の敵を撃破して帰る。第1小隊の属上等兵の分隊はこの間トロラク橋梁を確保して敵の攻撃を撃退した。附近の自動車の中から迫撃砲、自動小銃等鹵獲品多数であった。

大隊主力は中隊を超越して前進して行き、自分は為近軍医の手当を受ける。戦闘間は不自由を感じなかったが戦闘の一段落と共に気の緩みか歩行困難となる。暫くののち、聯隊本部が前進してきて、安藤聯隊長に「多くの損害を出して申し訳ありません」と報告する。聯隊長は「良くやってくれた。下がって負傷の手当てを十分にせよ」と答えられる。聯隊長の目がうるむのを見る。傍の副官に対して「本日のエモノは大なるべし」と師団長宛無電で報告を指示させるのが印象に残る。

中隊は大島少尉の指揮で前進させ重傷者網広、仁王頭と共に鹵獲自動車で衛生隊に下り、更に患者輸送車でピルトの第4野戦病院分院に収容される。後送の途中、今朝戦車と共に前進した戦場を眺めながら下る。戦死戦傷者約30名を出して突破した戦場と思えば感慨深し。準備された鉄条網5線を認める。第12中隊森藤少尉は第2次の攻撃前進中戦死したと聞く。

今朝の戦闘による教訓整理：

1. 戦車との協同戦闘について

(1) 先頭戦車は敵の射撃が集中して随伴歩兵の損害が多い。むしろ徒歩兵はつけず迅速機敏に行動させた方がよい。

(2) 極く少数の工兵、歩兵を乗車させた推進戦車と歩兵直轄の戦車に区別すべきである。中戦車を推進、軽戦車を歩兵直協と区分してもよい。このことは作戦要務令に明示してあるが、戦車側で肉薄攻撃を恐れる結果、本日の如くなった。

(3) 歩兵随伴の戦車は徒歩兵を離さないように速度を十分に調節する必要がある。また、歩兵も決して戦車から遅れてはいけない。戦車同士が間隔をつめるため速度を増加して、歩兵と分離した場合に損害が多い。所詮、戦車は盲でツンボであって如何に火力を発揮して敵を制圧しても沈黙して遮蔽した敵はそのまま健在で残り、戦車の通過后再び頭を上げて徒歩前進する歩兵を猛射する。逆に戦車の間であって前進する限り歩兵の突進力は大きく安全である。

(4) 歩兵直協戦車はその后端に車外との連絡用通話設備を持つ必要がある。

(5) 平素から歩戦協同戦闘の演習訓練を実施すべきである。

2. 戦闘一般について

(1) 追撃は小部隊でも周囲の残敵にとられず一挙に突進すれば成果甚大である。

(2) 敵中を突破する部隊は後方に対する

警戒を怠ってはならない。本日の様に他に主要自動車道が無い場合、敵も同一道路によって退却する。敵戦車、装甲自動車等によって後方から攻撃される危険が大である。

(3) 舗装道路上の地雷は発見容易であるが、路側の地雷は発見困難で極めて危険である。攻撃開始直前のスコールの豪雨によって路側のダイナマイトの発火装置が作動せず中隊は大きな損害を免れている。

(4) 無線機器の能力、台数を増加する必要が大である。6号無線では4～5軒離れては通じない。

6. 負傷して後方病院に移送

1月8日(木) ビドル

ビドルの野戦病院で一日を過ごす。歩行にはそう困難を感じない。

1月9日(金) イポー

朝、自動車によってイポーの兵站病院に後送される。本院はスングエイパタニーにあるため、現在地では人手不足のため繃帯交換も遅れがちの様子である。病院は分散配置で将校病棟は個室である。

1月10日(土) イポー

昨夜、敵の空襲があり、高射砲、機関銃の音が相当長く続いた。旧式の複葉機を撃墜したとの噂を聞く。中隊の負傷入院者を見舞って歩く。頭部貫通の仁王頭上等兵は意識不明のまま、お経をうわ言で口ずさんで居り、命旦夕に迫っている。腹部盲貫の岡田伍長も少々危険である。堀は本日亡くなった。豊嶋軍曹以下他の者は割合に元気である。スリム附近で負傷した英国人大隊長以下4名入院する。搜索隊の松本中尉、近歩4の牧野中尉と2名の同期生が入院しているのを見つける。

1月11日(日) イポー

松本中尉退院する。本日聯隊からイポー

の軍司令部に英軍捕虜800名が輸送されて来た。クアラルンプールの直前から引き返して来たと言うからクアラルンプールも陥落したと想像する。7日の戦闘以来敵に追尾して、15榴野戦重砲等鹵獲品多数で大戦果を上げた様子である。中隊の損害もその甲斐があったと喜ぶべきである。

軍報道部のニュースによれば比島のマニラは既に落ち在比米軍は一半島に追い詰められ、米国陸軍省の発表ではマッカーサー以下の司令部の所在は不明という。開戦後1ヵ月足らずでマニラ、香港の攻略は愉快である。

1月12日(月)イポー

変転極まりない前線に比べて病院の生活は何とも退屈である。自動車に載せて貰いイポー市街を一周する。州政府所在地であるから市街は予想外に大きい。

1月13日(火)イポー

治療遅々としてはかどらない。松前がスングイパタニーへ后送の由で挨拶に来る。

1月15日(木)イポー

第10中隊小林少尉追及の途中見舞に立ち寄る。

1月18日(日)イポー

リバノールから軟膏に治療変更される。皮下組織進展の様子。

1月20日(火)イポー

軍医と交渉の結果、22日退院と決定する。

1月21日(水)イポー

午後、病院長の運転する自動車で兵站と駅に行く。明朝の列車でクアラルンプールに向かうことに決定。

1月22日(木)列車内

10時、第5師団関係の退院者35名を引率して病院を出発する。11時発の予定が遅れて16時イポー駅を列車出発。車窓からカンパル附近の戦場を遠望する。

1月23日(金)クアラルンプール

午後、クアラルンプール到着。第9中隊は警備隊として第1中隊と共に市内に駐留していたので直ちに駅の前のマジエスチックホテルを宿舎としている中隊に帰る。

1月24日(土)クアラルンプール

警備司令官に帰任を申し、師団への追及者の処置を独立臼砲隊に依頼して帰る。30糎臼砲の性能を聞いて一驚する。

陸士本科の有利区隊長が少佐になり独立工兵中隊長としてマレー戦線に来ているのを知る。恩師との再会切望。23時頃空襲がある。

1月25日(日)クアラルンプール

警備司令官が交代して新任の兵站地区司令官佐分利大佐を案内して各分哨を巡る。

1月26日(月)クアラルンプール

郊外の露天風呂に約30名と共に行く。皮膚病に効能ありと称する。

1月27日(火)クアラルンプール

白人捕虜7名を鉄道隊から連れてきたので収容所に送附する。

1月28日(水)クアラルンプール

明日昼警備を交代することに決まる。

1月29日(木)クアラルンプール

担当の西警備地区を警備中隊三橋少尉に申し送り警備司令官に申告を行う。聯隊への追及方法は兵站と打合せの結果、ゲマス迄は汽車を利用する予定となる。1月30日(金)クアラルンプール

鉄道事故のため列車不通で出発遅れ、夕刻に列車が開通したが、乗車できる余裕は30名に過ぎないため中隊は明朝出発して自転車行軍で追及と決定する。

1月31日(土)セレンバン

8時クアラルンプール出発、夕刻セレンバンに到着、宿営する。行程約40哩。

2月1日(日)タムピン

タムピンまで前進する。行程約33哩。

2月1日(日)ゲマス

ゲマスまで前進。行程31哩。1月15

日戦死した戦車第1聯隊の同期生吉水中尉の墓標を詣でる。

2月3日(火) ラビス

ラビスに前進。行程40哩。

2月4日(水) アエルヒタム

アエルヒタムに前進。行程40哩。(注：負傷のため自転車に乗らず、山根又は中尾の運転する乗用車で移動した。)

(次号に続く)

平成26年1月号 秩父122号

諸隈中隊長戦陣日誌④

—マレー・シンガポール攻略作戦—

諸隈 良夫

陸軍航空士官学校
第7中隊
第3区隊長



目次

- 1.開戦前夜 (秩父 119号)
- 2.開戦即タイ領テーパー上陸(秩父 119号)
- 3.タイ・マレー国境を通過(秩父 120号)
- 4.カンパルの戦闘 (秩父 120号)
- 5.トロラク・スリムの戦闘 (秩父 121号)
- 6.負傷して後方病院に移送 (秩父 121号)
- 7.シンガポール島攻撃一番乗り
- 8.シンガポール陥落
- 9.マレー・シンガポール警備
- 10.アラフラ海セラル島守備

7. シンガポール島攻撃一番乗り

昭和17年2月5日(木)

先行してジョホールバル手前8哩のゴム林の中の聯隊本部に追及して聯隊長に帰隊を申告する。ジョホール水道渡河点偵察のため第1大隊将校と同行して前進の途中小林少佐他の第3大隊将校に会う。渡河点

に行く途中にマレー河があり、大隊長、中隊長数名のみが渡り他は引き返す。夕刻第9中隊到着する。第6中隊と交代して軍旗中隊となる予定である。(注：そのまま第3大隊に残った)

2月6日(金)

朝集結地を出発して渡河点との中間地区に移動する。

2月7日(土)

将校のみ先行して渡河点手前約千米の独立工兵宿営地に行き、上陸用舟艇(船外機付き折畳舟)を運行する工兵と協定を実施する。

部隊は夕刻到着して付近に配宿する。渡河部署は第3大隊右第1線(重点大隊)大隊内は右より12, 11, 9, 10各中隊横一線。明8日夜発進して9日0時上陸の予定である。近衛師団の一部は今夜東部ジョホール水道のウビン島に対して陽動作戦の上陸を実施する予定である(注：中隊の兵士に対して遺書、遺髪、爪等を封筒に入れて残したいものは預けるように指示した気もするがはっきり覚えていない。自分は何もしなかった)。

2月8日(日)

朝、中隊宿営地から南方約150米に進んで、初めてジョホール水道とシンガポール島を遠望する。テーパー上陸以来の目標のサリンバー島が見える。

午前中、独工聯隊本部に当方の幹部将校全員集合して細部の的確な協定を実施する。第9中隊は敵眼を遮蔽したマレー河河口の内側で乗艇して敵前を2軒横行して大体主力の水道直接汎水部隊と共に渡河に移る予定である。乗艇位置を視察したあと直接水道の岸に行き上陸地点付近を双眼鏡によって視察する。折から友軍砲兵の攻撃準備射撃が開始され、殷々たる砲声と共に敵岸水際付近に集中弾が落下して仲々の壯観である。

椰子林の中で敵兵の走るのが双眼鏡で見える。出発迄の間、上陸地付近の地図を一生懸命に覚える。夜間混戦が予想されるので、概略の地図を暗記する。

20時30分出発、宿営地から乗船位置に前進する。23時30分乗船開始。折畳舟を2隻宛併列連結してそれぞれに船尾に発動機を取り付けたもので、今までの上陸作戦にいつも使用した鉄製の舟艇に比べて小さく弱々しい感じである。

23時40分歴史的な発航を開始する。

2月9日(月)

航行約15分、夜光虫の光る白波を蹴立てて援護射撃の砲声の殷々たる中をシンガポール島に驚進して、敵の射撃を受けることなく達着する。第1回上陸部隊の到着頃からジョホール水道の中間に敵の砲撃による水柱が林立するのを見る。上陸地点はマングローブ樹林の湿地であったが、先ず、2ヶ小隊を把握して一路南方に突進する。途中残りの1ヶ小隊を掌握して更に機関銃小隊、大隊砲小隊等も合わせて指揮下に入れて前進する。70高地を経て軽便鉄道の線路位置を見つける。以後線路に沿って前進して長い鉄橋を渡り95高知付近に進出した時、右側方に英語の号令を聞く。1ヶ小隊と1ヶ分隊で攻撃を命じたが敵を補足できない。95高地を確保して一時大隊主力の進出を掩護した後、130高地に向かい前進する。

第2小隊を先頭に前進中130高地手前で突然敵の攻撃を受けて(迫撃砲弾または手榴弾)第2小隊長岡本少尉重傷他第2小隊の約半数の戦死、戦傷の損害を受ける。直ちに中隊を展開して前方を攻撃、迫撃砲1門を鹵獲して敵を駆逐する。負傷者を処理中に聯隊本部も130高地に前進してきて漸く夜が明ける。

大隊予備隊を命ぜられて更に前進を続ける。敵戦闘機ハリケーンが低空で飛行する

が機銃掃射は受けない。約1500米前進した地点で4周から敵の射撃を受けて一時陣地確保の体勢を取り、着剣を命じたが白兵戦には至らないで敵退却する。昼過ぎ第10中隊の占領していたアマケン附近の高地に前進して大隊集結。その体勢のまま壕を掘り露営する。前任の安川大尉と共に夜間を利用して突進の継続を大隊長に進言するが聞き入れられず現在地で前方の敵情を見ると主張される。第18師団兵士と混淆が見られたが昼間の戦闘で見た第18師団兵士の前進は勇敢である。本日、第8中隊長古谷大尉、第2機関銃中隊長佐々木中尉、聯隊次級副官山本少尉の戦死を聞く。

第9中隊戦死：原田数雄、国光勇、原田尚武(3名共第2小隊分隊長)、岡野勤、前坂勝巳、戦傷：岡本少尉他。



小谷少佐、佐々木大尉の墓標の前で筆者

2月10日(火)

昨夜来、燃料タンク炎上の煤煙で黒い雨が降る。旧知の聯隊出身の越次少佐が大本営派遣参謀で来られる。「シンガポールが陥落したあとどうなりますか」の我々の質問に「俺も判らない。ただ風船が一杯にふくらんだ状態で破裂が危ない」と答えられる。

聯隊の軍旗中隊を命ぜられて聯隊本部と共にテナガ飛行場東南側に前進。当面の敵は13時~16時の間に正面高地の堅固な陣地を捨てて退却したので本道に沿って夜間前進する。

2月11日(水)

ジョホールーシンガポール道との交差点で21聯隊を追越して第2大隊先頭で本道上を戦車と共に前進する。3時頃ブキテマ三叉路、道標埋付近で第2大隊は島の西部方面より退却する敵と遭遇して戦闘を開始する。ブキテマ部落から敵対戦車砲の射撃で桃色の曳光弾が地上40糎の高さで道路上を飛来するのを見る。三叉路を閉塞した友軍戦車に敵装甲車が体当たりして敵の車両が炎上する等、激戦となる。天明と共に聯隊本部は道路左側のゴム林内に入ったが敵の砲撃激しく道路右側に移る。この間西方から退却する敵の進路を遮断したためブキテマ部落西方一帯は相当激甚な銃声が連続した。

第2中隊長真田中尉が聯隊予備隊として本部に来たので砲弾落下の中で歓談する。「サリンバン島を攻撃すべしという大袈裟な命令を貰って勇んで上陸したが、敵は一兵も居らず拍子抜けであった」と大笑いされた。



サリンバン上陸記念碑(戦後シンガポール政府建立)(戦闘の様子が克明に記載されている。2008年10月川島撮影)

午後、ブキテマ部落附近で道路の下を横断する直径約90糎の土管に入っていた他隊の兵士数名が土管入口で炸裂した砲弾のために負傷したのを見て、ナポレオンの

言葉の「空駆けり地に潜るとも弾丸は当たる時には当たる」を痛感する。部落軒下で椅子にかけていた自分の直前の道路中央に砲弾が落下破裂して椅子ごと後方に飛ばされたが全く負傷は無く、傍に腰を下ろしていた他隊の兵士が即死した。

2月12日(木)

ブキテマ部落より前進して夕刻競馬場に進む。途中、敵砲弾によって第1小隊中野龍温戦死。真田中尉、三宅少尉、長岡少尉の戦死を聞く。真田中尉は聯隊予備軍から第一線に増加されて1時間足らずで戦死された由である。その直后、安藤聯隊長に呼ばれて行くと、慄然たるご様子で真田中尉の戦死を告げられ「次々と有為の中隊長が戦死しては聯隊の戦力が低下する。お前達若い者は勇敢ばかりでなく戦死しないことを心掛けよ」と訓えられた。「判りました」以外に答えようも無く黙っていると、傍から聯隊長と同期生の野砲第5聯隊長中平中佐が「この激戦では幹部に戦死者出てもやむを得ない。聯隊長の安藤がそのように落胆してはいかん。諸隈一人に説教しても仕方がない。もっと元気をだせ」と慰め且激励された。弾雨の下の聯隊長同士の友情を感じる。花輪第2大隊右一線、丸谷第1大隊左一線で依然攻撃続行。第9中隊は競馬場スタンド前の広場に壕を掘り敵の集積物質を掩護物として損害を避ける。

本日、前進途中地震のような山ごと揺るがす砲撃を数回体験したが、敵要塞砲の射撃か味方の30糎臼砲の射撃がよく判らない。いずれにしても未体験で兵士一同も驚嘆する。

中野龍温の戦死はゴム樹林に当たり頭上で炸裂した敵砲弾破片が心臓を直撃して即死したものである。

軍袴の物入れから黄色い粉を出している兵士に何をしているかと訊ねた処、物入れに入れた手榴弾に敵の破片が命中して手榴

弾が砕けたと答えた。手榴弾の中味は黄色火薬である訳で、よくぞ破裂しなかったものである（注：この兵士が中隊の者か他隊の者か記憶がはっきりしない）。

2月13日（金）

聯隊本部と共に終日競馬場で過ごす。スタンドの塔上に上り周囲を展望すると競馬場西北側に沿って友軍90式野砲の砲列があり、砲撃を繰り返してており、敵砲弾が競馬場内と建物に頻りに落下する。シンガポール市内に20階建位の高さのビルが眺められた。敵観測所の存在が予想される。目前10米位を喰り上げて通った敵の砲弾が競馬場切符売場の建物に命中して中に收容されていた捕虜の叫び声上がる。昨夜、中隊の露営地内にも敵砲弾が落下したが損害は無い。ただし、敵の糧食用のバターの飛沫を全身に浴びた兵士がいる。

2月14日（土）

聯隊本部は競馬場から東南2軒の華僑中学校に前進する。中隊は後方のゴム林内に壕を掘り分散宿営する。古谷少尉と防空壕内にて一日を過ごせり。

8. シンガポール陥落

2月15日（日）

午後、軍旗中隊を交代して第3大隊に復帰する。大隊は旅団直轄右第一線として、夜襲攻撃中であつたが、当方は既に敵軍使の到着の報を得ており、敵降伏は必至であるから中隊には壕を深くして損害を避け、攻撃準備の必要はないと指示する。

18時頃、敵降伏の報を受ける。記念すべき2月15日仏滅の日にマレー半島上陸以来の目標は陥落して、遥かに皇居を遥拝することが出来た。後方の山々では万歳の歓声にどよめくが第1線は敵と対峙したまま粛々として声なく、上陸以来の労苦と亡き部下を偲んで思わず熱涙する。

2月16日（月）

夕刻、南洋女子中学に移動配置する。夜遅く感状申請のため大隊本部に呼ばれる。くれるはずも無い感状の話など迷惑の上もない。

2月17日（火）

敵降伏からようやく2日が経ち落着きを取戻した心地がするが、昼間地雷の爆発音が2回あった。53期倉田、真田両兄、同期の和田、佐々木と上海で一緒に飲んだ仲間は幽冥境を異にするとは如何に戦を本領とする現役の者にとっても転た感無量のものがある。中隊の兵士は一致団結してよく中隊長についてきてくれて全く感謝の他は無い。

2月18日（水）

聯隊本部において師団長松井中將より聯隊将校全員に対して訓示がある。

聯隊の損害は戦死240余名、戦死戦傷を合わせて990余名であると聞く。

指揮班の森脇兵長が単車を操縦して本道に出て並木に衝突して脳底骨折人事不省の重傷を負い第1大隊医務室に收容される。シンガポール タンドクセン病院に移送入院させたが危篤である。本日午後、聯隊長注意事項を通達して、交通事故と単独外出を禁止した直後の事故で全く注意の徹底が困難なことを知った。

（注：夕方、森脇兵長が英軍用のオートバイで宿舍の門を出て行くのを2階の窓から見て、横のスタンド用の鉄棒を引きずっているので危ないと思ったが声を掛ける暇がなかった。）

2月19日（木）

乗用車を運転して大島、藤村、田中少尉と共にシンガポール市内を回り、病院に立寄り、森脇の負傷現認証明書を届ける。人事不省のままである。

2月20日（金）

ラッフルス大学広場で軍合同慰霊祭。3

個師団の軍旗10旒整列するのを見る18師団の3旒は真新しく、近衛師団の3旒は半ば破れ、第5師団の4旒の軍旗は皆房ばかりであって歴戦の度を示している。

慰霊祭のあと感状の授与式があり、第5師団に与えられた感状の文面には「就中歩兵42聯隊は安藤大佐の指揮の下トロラク・スリム附近に於いて敵を殲滅して偉功を奏し云々」と聞こえた。トロラクにおいて共に敵陣を突破した戦車中隊長島田少佐に感状が授与された。

2月21日(土)

本日は小生の第20回誕生日。

師団合同慰霊祭が競馬場において挙行される。1,100余柱の英霊 永えにマレー及び昭南の島に眠る(注:はじめて「シンガポール」を「昭南」と呼称している)。

2月22日(日)

午前、南洋華僑中学校に聯隊全員集合、聯隊長の訓辞がある。午後、中隊を引率して自転車によって昭南市街と港を見学する路、補助憲兵宿舎に立寄る。夜、大隊将校会食に出席する。古谷少尉の残置荷物紛失して凶囊と共に軍事秘密書類「英領馬來事情」が行方不明となる。

2月23日(月)

夜、聯隊将校会食。上海以来の宴会で人数は大分欠けたが聯隊長を中心にして愉快的な一刻を過ごした。

大隊本部で日本のラジオニュースを聞くとジャワを除く南方各地に日本陸海軍が進出して赫々たる戦果と共に凄まじい勢いで戦局が進展している。聯隊長の話では近々にジャワに対して某中将の率いる2ヶ師団が上陸して席捲する予定とのことである。日本人として正に壮快の極みである。(次号に続く)



89式中戦車

諸隈中隊長戦陣日誌⑤

—マレー・シンガポール攻略作戦—

諸隈 良夫 陸軍航空士官学校
第7中隊第3区隊長



昭和17年2月16日の読売新聞の記事

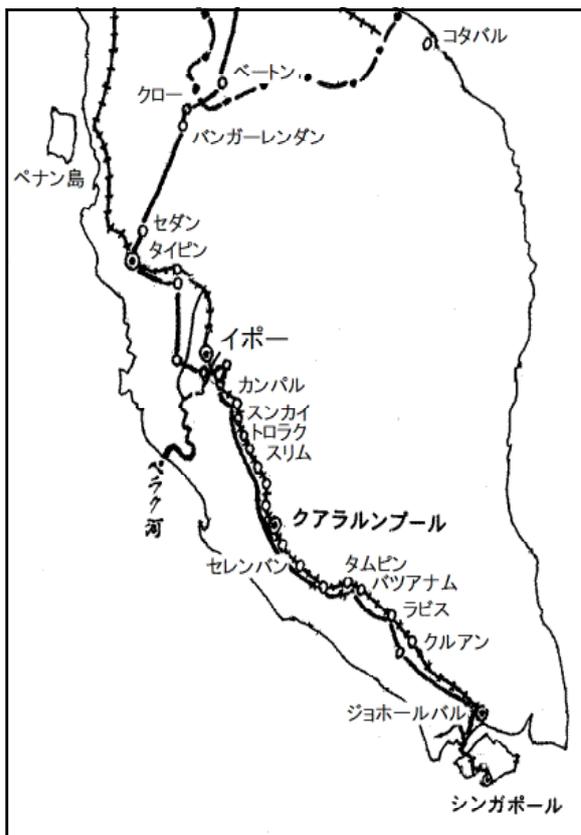
目次

- 1.開戦前夜 (秩父 119 号掲載)
- 2.開戦即タイ領テーパー上陸(秩父 119 号)
- 3.タイ・マレー国境を通過(秩父 120 号)
- 4.カンパルの戦闘 (秩父 120 号)
- 5.トロラク・スリムの戦闘 (秩父 121 号)
- 6.負傷して後方病院に移送 (秩父 121 号)
- 7.シンガポール島攻撃 (秩父 122 号)
- 8.シンガポール陥落 (秩父 122 号)
- 9.マレー・シンガポール警備
- 10.アラフラ海セラル島守備

9. マレー・シンガポール警備

昭和17年2月25日(水) タムピン

軍旗中隊として朝10時出発、聯隊本部と共に自動車によってタムピンまで前進する。ジョホール水道の陸橋の堤は長さ約1000米である。



マレー半島要衝図

2月26日(木) スンカイ

想い出のトロラクを過ぎてスンカイに宿泊する。スリムリバー南方に当時の先頭戦車が擱座炎上して残置されているのを見る。(注：尖兵長として搭乗戦死したのは渡辺中尉と交代した佐藤中尉(少候出身)である。)

2月27日(金) イポー

イポーに到着。聯隊本部に隣接する宿舎に入る。広大な家であるが、兵士の寝室とする場所が不足である。電気冷蔵庫が2台あり、2階の端の小生の部屋に冷房設備がある。野宿が本分の吾々には身に余るものである。

2月28日(土) イポー

朝、兵站病院療養所池田軍医中尉を訪れて入院間の礼を述べる。在イポーの軍関係各機関は入院当時と同一のままである。教育訓練とか掃蕩作業の指示があり、岡本、古屋両少尉の帰来が待たれる。

3月1日(日)

午前中、中隊主力到達する。夜、軍政部の招待でルビー劇場で映画鑑賞。

3月2日(月)

憲兵隊を訪れてイポー市内の状況を聞いたが未だ憲兵隊も日が浅く、さしたる情報は得られない。聯隊長の指示もあり、当分は潜伏斥候、巡察等を派遣して夜間に警戒、監視を実施することに決める。

3月3日(火)

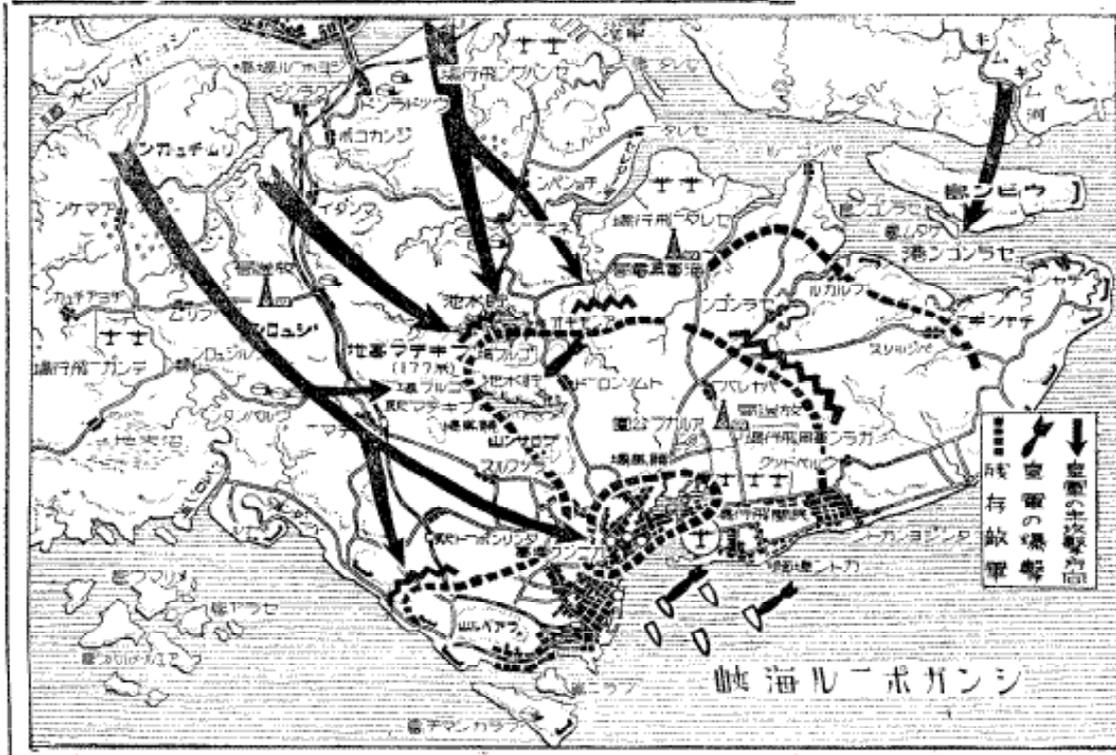
舎営日直将校勤務。

3月4日(水)

イポー西南方8軒附近で共産系華僑が毎夜集会の情報が入る。

3月5日(木)

1時過ぎ前日の情報に基く地点を急襲する。猟銃らしいもので射たれたが兵器は発見出来ず8名を連行して帰る。



昭和17年2月15日の朝日新聞の記事中のシンガポール攻撃図

3月6日(金)

午後、20名を連れてイポー北側及びメンレング西側付近を検索したが収穫なし。

3月8日(日)

大島小隊でイポー西北の検索を実施。先日逮捕の8名中から2名を帰す。

3月9日(月)

軍政部からラジオを1台借用、よく聞こえる。聯隊長に呼ばれて夜遅くまで戦闘要図を書くのを手伝う。

3月10日(火)

陸軍記念日。起床前に非常呼集を実施する。終わって舎内に入った時、ラジオでジャワの蘭印軍降伏の報を聞く。蘭印軍9万3千、米英豪軍5千無条件降伏。上陸以来僅か9日目である。

3月11日(水)

舎営日直将校勤務。大島少尉以下30名、イポー市東方地区示威行軍を実施する。

3月13日(金)

戦闘詳報、功績、陣中日誌の記載について中隊長を集めて大隊本部で会議を開く。各戦闘場面を修飾して嘘八百の羅列とは醜

い。戦闘詳報は真実を伝えるものであるべきで、軍人は清廉高潔毀誉褒貶に拘わらない筈である。シンガポール上陸直后130高地で負傷した岡本少尉が帰来する。夜遅く聯隊本部に呼び出されて第3大隊は旅団司令部と共に昭南島警備に当たることを命ぜられる。明日、出発を指示される。

3月14日(土)

出発準備を行っていたが明朝出発と変更になる。

3月15日(日) セレンバン

9時30分自動車で出発、夕刻セレンバン着、宿営。

3月16日(月) ジョホールバル

9時30分出発、夕刻ジョホールバル着、宿営。

3月17日(火) ニースン

昼過ぎ大隊本部が追及してきて直ちに警備地分進の命令があり、昭南島ニースンに移動する。

3月18日(水)

歩兵41聯隊の菅野隊と警備を交代する。第1小隊大島少尉以下をニースン水源

地北方の英軍兵営内の印度兵捕虜収容所に第2小隊岡本少尉以下をジョホール陸橋昭南側の検閲所に配置と決定する。

3月21日(土)

捕虜収容所の印度人将校と会食する。本物のカレーは口がしびれる程辛い。ベルリンオリンピックに出場したホッケー選手の印度将校に会う。

4月4日(土)

安藤大佐の後任の新聯隊長西原大佐の初度巡視を受ける。色黒く精悍な感じである。大隊本部附近の敵の38糎海岸砲を見学する。広大な地下室を持つ要塞である。

《日記中断》

7月10日(金)晴

昭南島内の戦没者の墓と戦蹟を中隊を連れて巡る。



裏面

昭和17年4月牟田口中将建立戦死者の墓

(シンガポール日本人墓地公園内：裏面に戦死者の名前あり。2008年撮影)

7月21日(火)

大隊幹部教育のため小隊訓練を北貯水池、ゴルフ場において実施する。岡本尉の演習指揮は良好。

7月27日(月)晴

二スを撤収して西警備隊本部東側に移転する。宿舎は鉄筋コンクリート2階建て

で水洗便所、電熱風呂沸し等が設備してある。軍人の環境は有為転変甚だしいと思う。

7月28日(火)晴

大東亜劇場で大毎、東日慰問団の演芸を鑑賞する。江口隆哉、宮操子の舞踊、有田愛子の歌がある。更に夜昭南劇場で大隊の音楽の夕べを聞く。

7月29日(水)晴

工兵聯隊における上官暴行事件を聞く。要は将校が兵と苦楽を共にしない事が原因である。自省自戒に努めると共に小隊長にも注意の要がある。

8月2日(日)晴

歩兵21聯隊の同期生酒井中尉が昭南島に来たので川津(捜索隊)松島(11i)田代、松元等と会食する。酒井の情報では第5師団は8月中旬守備隊を編成抽出する。9月中旬マレー警備の責任転換後、復員下令。編成改変のあと概ね満州方面に赴くと予想される。

8月4日(火)晴

中村大隊長の少佐進級の内祝いで大隊本部で会食。

9月19日(土)晴 イポー

復員帰還のため日記は書いても携行不能と思って記載を中止していたが、逐次延引するので数ヶ月後に破棄することも覚悟の上で再び日記を書く。三度訪れたイポー市である。マレー第3の都市イポーも昭南の繁栄には比ぶべくもない。

《中断》

11月1日~5日

師団戦史旅行。トロラク附近の戦闘を説明の任にあたる。光栄に感ずる。

11月23日(月)

8月以来の復員転進命令は「大陸命令」によって中止された。いささか弛緩した気分を一転して新任務準備のために心構えを引き締めねばならない。「ソロモン」方面では日夜激闘を繰返す部隊があり、支那大

陸には黙々として残匪の掃蕩に努力する友がある。我一人安閑としてボケている時ではない。行賞発令を見て、陸士本科同中隊の今利雄一、船橋清の戦死を知る。

11月27日（金）

26日から2日間に亘る「チエモル」附近の討伐を中止してイポーに帰る。第2大隊出動のための壮行会を迎賓館で開く。工兵聯隊長が混成部隊の指揮官であるから工事関係が主体かと予想する。

12月9日（水）

イポー出発。

12月10日～12日

クアラルンプルル滞在。

12月12日（土）

ポーツスエツテンナム到着。

12月16日（水）

スエズ丸によって昭南島到着。
(以下次号)

諸隈中隊長戦陣日誌⑥

—マレー・シンガポール攻略作戦—

諸隈 良夫 陸軍航空士官学校
第7中隊（長門隊） 第3区隊長



中隊舎の舎前にて→



昭和17年2月18日朝日新聞の大東亜戦争戦局大観と見出し記事

（編集子注：昭和17年1月、日本の大本営は「ニューギニア及びソロモン群島の要地の攻略を企画する」と決定、3月8日に陸軍はニューギニアのラエ及びサラモアに上陸し占領した。しかし、海軍は6月にミッドウエイで大敗した。これを契機に連合軍は8月にガダルカナル、11月にラエ、サラモアへ逆上陸し、日本軍は追い詰められた。このような時期に諸隈中隊長はアラフラ海諸島の防衛のために昭南島を出航した。）

目次

- 1.開戦前夜 (秩父 119 号掲載)
- 2.開戦即タイ領テーパー上陸(秩父 119 号)
- 3.タイ・マレー国境を通過(秩父 120 号)
- 4.カンパルの戦闘 (秩父 120 号)
- 5.トロラク・スリムの戦闘 (秩父 121 号)
- 6.負傷して後方病院に移送 (秩父 121 号)
- 7.シンガポール島攻撃 (秩父 122 号)
- 8.シンガポール陥落 (秩父 122 号)
- 9.マレー・シンガポール警備 (秩父 123 号)
- 10.アラフラ海セラル島守備

10. アラフラ海セラル島守備

(1) 昭南島からケイ島トアルへ

昭和17年12月18日(金)

昭南島発

12月21日(月)

ジャワ島スラバヤ到着

12月25日(金)

スラバヤ出港。マズラ島沖において敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて浸水、スラヤ港に帰港する。

昭和18年1月7日(木)

第一吉田丸に乗り換えてスラバヤ出港。途中座礁してサルベージ船に救出され、1月16日セラム島アンボン港到着。海上トラックに乗り換え1月28日ケイ島トアル着。《以下中略》

(2) タニンバル諸島サムラキ

3月1日(月)

タニンバル諸島のララト島のリタベルに向かい、翌2日16時リタベル港到着。

3月6日(土)晴

サムラキに向かう。翌日15時半サラキ港到着。

3月13日(土)晴

夕刻出発して舟艇でアダウトの地形偵察に行く。

3月14日(日)晴后雨

終日アダウト周辺を地形偵察で回る。適当な観測所は無いが歩兵砲的に使用するなら砲兵の配置は可能である。同行の高中尉風邪で発熱する。

3月15日(月)晴時々雨

アダウト発チモールに行き同期で47聯隊の櫟(ゆずりは)中尉と共にチモール及びワルルン附近を偵察する。夜サムラキに帰着する。

3月16日(火)晴

ラウラン沖を彼我不明の大発らしき舟艇6隻通過の情報があり、捜索のために47聯隊後藤中尉の指揮の下に第3小隊をリタベルに向け派遣する。

3月18日(木)晴后雨

電報によれば陸軍輸送船2隻と護衛艦第五拓南丸の船団は、アルー諸島ドボ往復途中5回延べ16機の爆撃を17日受け、敵機撃墜5機、損害陸軍戦死17、戦傷60、海軍戦死2、戦傷9という。奮戦大いに称揚されるべきである。

3月20日(土)晴

アンボン、トアルに対して敵は夜間爆撃を開始するに至る。



アラフラ海の諸島図

(3) セラル島アダウト

4月5日(月)

空襲警報前後6回発令。第1回は4発2機北に向け通過。第3回は友軍戦闘6機南進。その他はすべて彼我不明の爆音のみである。24時聯隊本部アダウトに向け出発。

4月6日(火)

午後雲上を旋回していた敵機がオリリに投弾。本夜アダウトに移転の予定を天候不良のため延期する。

4月7日(水)

空襲警報4回発令。4回目に敵双発1機が機銃掃射と海中に投弾して去る。17時30分出発、20時過ぎにアダウトに到着。

4月8日(木)

森林内に設営を実施。対空遮蔽を厳にする必要がある。

4月9日(金)

夕刻サムラキ方向に高射砲音を聞き、間もなく双発1機部落東方を高度約2千米で南方に去る。目下の急務は防御施設の完備に在るが、聯隊長以下聯隊本部は宿営に汲々として一片の防御に関する指示命令も出ない。

4月16日(金)

昨夜サムラキに入港した水雷艇「雉」は途中で敵4発6機の爆撃を受けて交戦50分に及び弾薬を討ち尽くしたが直撃弾は受けなかった由である。9時30分コンソリデーテットB24 2機高度3千米で上空を東南方から西北方に悠々通過する。

4月20日(火)

馬淵師団参謀長と田中軍作戦主任参謀がアダウトに到着する。

4月21日(水)

参謀長一行アダウト附近を視察の後、夜リングットに向かう。月明皎々暑からず寒からず戦争でなければここは平和郷の筈である。

4月23日(金)

リングットから帰来した馬淵参謀長、田中軍参謀と会食する。参謀長は温厚な人柄である。

5月1日(土)

夕刻より発熱 39度

5月4日(火)

昨3日敵戦闘機ロッキードP38(双発

双胴)が飛来したことが判明する。初ての出現である。

5月10日(水)曇

マラリア患者発生、現在患者は44名。10時過ぎ友軍戦闘機5機北進。21時15分彼我不明の爆音を聞く。

5月13日(金)

船舶工兵中隊長稲村大尉からガダルカナル島附近の戦闘の講話を聞く。昨年8月から本年1月下旬に至り損害1万6千でその大部分は補給が続かないための飢えと戦病死とは悲惨の極みである。弾薬も食料もなく奮戦して倒れた英霊には手向けの言葉もない。

5月14日(金)晴

9時過ぎ99式軽爆1機低空で飛来して上空を3度旋回、通信筒を投下してハンカチを振って去る。

5月21日(金)晴

11時頃ノースアメリカン3機サムラキを空襲。1機撃墜、捕虜豪軍少尉1名収容と聞く。聯合艦隊司令長官山本五十六大将戦死の報を聞く。

5月26日(水)雨

7時半から中隊教練。水際防御演習施。

5月28日(金)曇

去る21日撃墜した敵機の乗員1名が25日サムラキ湾を泳ぎ渡って日本軍に収容された由である。

6月14日(月)晴

去る11日リングット飛行場に友軍機1機試験的着陸に成功。

6月18日(金)晴

10時20分敵マーチン軽爆17機リングット、ウエライン附近を急襲。ついに日本軍のセラル島占領が発見された。損害戦死8名、重傷2名、軽傷4名。戦死者中に飯田讓二軍医中尉が含まれる。

6月21日(月)晴

出張から戻った今橋准尉にリングット附

近の被害状況を聞く。爆弾の大部分は瞬間信管付きで土民の死傷者が多い模様である。リングアット飛行場には昨夜ダーウイン空襲の友軍機1機が不時着した由である。

6月24日(木) 晴

9時45分敵双発3機低空にて来襲。機関銃と20耗機関砲で掃射を受ける。棧橋倉庫炎上。人員その他被害無し。リングアットにも7機が来襲して飛行場の友軍機2機炎上との報告があった。21時今橋准尉は少尉候補生受験のためケイ島に向け出発。

7月1日(木) 晴

昨6月30日ソロモン群島ニュージョージア島に敵上陸の情報がある。8時過ぎ敵機2機来襲、機銃掃射を行って去る。

7月2日(金) 晴

昨日のニュースに続いてニューギニアのラエ、サラモア附近に敵上陸との情報を聞く。

(4) セラル島リングアット

7月10日(土) 晴

リングアットに海路移動実施。17時20分搭載開始、18時25分出発、23時レミアン湾達着。水際より400米で舟艇が座礁の為荷物揚陸作業は困難を極める。

7月11日(日) 晴

4時ようやく揚陸作業終了。貨物自動車2台に分乗して黎明にリングアット西南方約300米の椰子林内の宿舎予定地に到着する。椰子林の繁り方は粗く上空に対して遮蔽は不完全である。

7月12日(月) 晴

7時、ロッキード1機空襲。部落を掃射して南方に去る。宿舎の建設を開始、小隊舎1棟の骨組と屋根を完成する。建築隊の作業は遅く、中隊独立で工事を進めることに決心する。中隊全員の真剣な努力で作業進捗は良好である。高中尉より煙草3個を貰い受け2個は兵員に分ける。

7月14日(水) 晴

24時軍旗を奉じて聯隊本部及び通信その他の部隊がアダウトからレミアン湾に到着、迎えに行く。

7月20日(火) 晴

朝、椰子樹上の鳩を拳銃で撃ち落とす。陸士在校中から拳銃射撃にはいささか自信がある。岡本少尉、森坂見習士官と共に飛行場附近を偵察する。午後4発2機南方から飛来して数回旋回して北進する。矢次兵長の中隊告別式を実施する。

7月24日(土) 晴

ブナ附近に在った41聯隊の状況を聞く。退却に当たって体力の弱った兵、負傷して行動不能の兵等は、中隊長に自らも申し出てとどまって主力を援護して奮戦したという。中隊長は答える言葉無く、後日涙ながらに「兵は神様なり」と語ったという。死生を超えて崇高な犠牲的精神は鬼神を哭かせるものがある。豊嶋軍曹以下6名航空第2次身体検査受験ためスラバヤに向けて出発する。航空の重要性を考えれば中隊の減員は惜しくない。成功を祈る。



8月4日(水) 晴

午後ロッキードハドソン2機来襲、椰子林内に集積した野砲弾薬に引火して夕刻まで爆発続く。同時、飛行場南側の焼夷弾攻撃によって生じた火災は22時に到るも消火せず、ウエライン方向に延焼しつつある。

8月6日(金) 晴

午後「流れ丘」「飛行場高地」附近を偵

察。セラル島防御のため更に歩兵1ヶ大隊、山砲1ヶ中隊、独工1ヶ中隊増強の旨電報がある。

8月10日(火)曇

午後 聯隊長中平大佐(野砲5聯隊長)田沢参謀等に随行して飛行場高地から猿山、レミアン海岸に到る地域を陣地偵察して漸く配備の概要が決まる。中平大佐は実に熱心積極的に指示適切判断明快で頼もしい。

8月12日(木)晴

胃痛と不眠症で悩む。防禦の方針が専守防禦から水際での攻撃防禦に変更さつつあるが有力な砲兵が無い状況では水際部隊の收容が困難で、慎重に考慮が必要である。

8月17日(火)晴

新しい作戦命令によれば搜索聯隊第3中隊の当地配属が決まった。リングアット附近の兵力は歩兵2ヶ大隊と1ヶ中隊、砲20門、軽装甲車10両となる。

8月18日(水)晴

中隊宿舎完成移転。

8月20日(金)晴

午前中リングアット湾西南岬附近を偵察する。海岸には断崖連り風望良好で書物にいうドーバー沿岸のごとくである。

8月22日(日)晴

午前第3飛行団長視察に来島。双発戦闘機2機の護衛する重爆で到着。午後中隊の兵と共に岬附近に行き軍歌演習と海岸で遊ぶ。夜、伊藤痴遊の「龍馬と慎太郎」吉屋信子の「花」を読む。

8月23日(月)晴

午前1回、午後1回、夜間2回空襲を受ける。飛行場レミアン街道附近に掃射を受ける。

8月24日(火)晴

午前中陣地偵察、拠点となる高地は多い。16時敵カンダル方向から空襲、リングアット部落中央とウエラインに投弾射撃を行う

も被害無し。「タニンバル防衛計画」が配布されたが具体的な記載が無く幹部の戦術能力不十分と思われる。

8月25日(水)晴

昨夜、第2大隊長境少佐以下先発約100名到着。境少佐の初印象は良好である。

8月26日(木)晴

午前中友軍軽爆1機飛来。軍よりリングアット飛行場至急拡張の命令あり。

8月29日(日)晴

分隊長以上を集めてリングアット附近防禦の大要を学科で説明した後、中隊陣地を一巡して概略を会得させる。

8月30日(月)晴

午前中聯隊本部に中隊長以上集合して聯隊長から陣地構築に関する指示を受ける。補充兵8名到着、年齢は31~32才である。新たに松原見習士官が中隊長になる。森坂、松原両君に期待するところ大である。

8月31日(火)晴

午前、友軍双発戦闘機2機飛来。午後大隊長と各中隊長集合して猿山附近の陣地配備について研究を実施。ほぼ中隊陣地配備の腹案を決める。

9月4日(土)晴

聯隊長、大隊長に対し現地で陣地説明を行う。

9月5日(土)晴

配属機関銃小隊長浴野見習士官に陣地を指示。明日より工事着工の予定。

9月6日(日)晴

8時30分マーチン2機空襲。飛行場附近で工兵隊貨車1両、レミアン附近で飛行場中隊貨車1両、銃撃により炎上する。負傷1名。陣地工事開始。井戸、防空壕に着手。

9月10日(金)晴

イタリアの無条件降伏を報を聞く。独乙は苦境に陥いる。ヒットラーの心中や如何。

9月11日(土)晴

8時、12時、15時の3回敵ビューハイター3機来襲。3回目友軍双発戦闘機1機飛行場上空を旋回中で敵機発見と同時に突入して敵を攻撃、敵は超低空で分散遁走し痛快である。快報更に一つ、サムラキよりトアルに向かい航行中の海上トラック「杉丸」は8日ロッキードハドソン1機の攻撃を受けて応戦、見事撃墜して搭乗員を捕虜として収容トアルに入港したという。

9月13日(月) 晴

陣地構築作業。9時頃友軍双発戦闘機2機に護衛された重爆1機飛来。戦闘機は約30分間上空を旋回したが生憎敵機は来ない。イタリーを敵国とみなすの軍会報がある。

9月14日(火) 晴

8時30分ビューハイター3機来襲。9時双発戦闘機3機に護衛された直協偵察機で新歩兵団長柏徳少将来着する。午後初度巡視を受ける。この間ロッキード3機、続いてビューハイター3機来襲して掃射を行って去る。

9月15日(水) 晴

午後歩兵団長の陣地視察に随行する。本日から対空射撃開始の命があったが敵機は来ず。

9月17日(金) 晴

終日陣地構築指導と陣内の測地を行う。

9月18日(土) 晴

舎営日直将校に上番する。16時警戒情報を受ける。「本日1時チモール島ラウテンの方向探知機はラウテン東方海上を北進中の10隻内外よりなる船団2個を捕捉せり。タニンバルに來攻すれば本夜20時頃到着の距離にあり」という。夕緊急命令が下り、各隊は配備につく。中隊は聯隊本部と共に第3大隊本部宿舍付近に移動する。中隊宿舎には早川軍曹下15名を残して、重要書類以外の残置書類は機に依じて焼却することを命じる。第3飛行隊はチモール

島ラウテンに集結中の報がある。20時30分第11中隊岬部哨から報告が入る。「敵輸送船団らしきもの出現」次いで「確認せり」「5隻にして逐次近づきつつあり」「1隻は南方岬にかくれ現在は4隻」「舟艇を下しつつクレーンの音聞こえる」「月明と共に肉眼を以て確認し得る」「下された舟艇はの数5隻で附近を行動しつつあり」「輸送船は灯火を点じて作業中なり」等逐一話報告があり、このように細部に至って確認されるなら真実と誰ものが信じた。ただし砲兵観測所は確認せず、砲兵大隊長の意見によって推定射撃開始は行われなかった。23時30分、第3大隊将校斥候が岬分哨に至り「敵艦船を見ず」との報告が入る。21時から23時までの間緊張していたが24時就寝する。

9月19日(日) 晴

その後状況変化なく、中隊は早朝宿地に戻る。夜明けと共に友軍機、重爆、軽爆、軍偵、戦闘機等延べ約70機以上飛来した。これは昨夜上級司令部に対して「リングアット南方海上に敵輸送船らしきもの5隻進出せる如し、防衛隊は適宜戦闘を開始せんとす」と打電した後、軍通信隊が移動して故障のため不通となって、訂正電報を10時間后に出したためある。歩兵団司令部、師団司令部、軍司令部あるいは大本営までも「セラル島に敵上陸以後通信杜絶」として泰山鳴動の大騒ぎで迷惑をかけた誤報事件である。

9月20日(月) 晴

陣地構築指導。珊瑚礁の岩盤爆破作実施。

9月21日(火) 晴

突然に聯隊作業準備教育掛を命ぜられて境少佐を補助することとなった。

10月2日(土) 晴

揚陸作業指揮官を勤める。終了時敵機空襲があり、陣地と聯隊附近に投弾する。

10月5日(火) 晴

午前中防衛隊本部の中隊長以上の会合に出席。弾薬1会戦分と糧秣10ヶ月分を各中隊で保管する。弾薬はともかく糧秣は相当量になる。

10月7日(木) 雨

すでに雨季に入ったのか引き続いて驟雨がある。乾季に建てた宿舎は雨漏多く修理で大騒ぎである。

10月8日(金) 晴

午前中陣地構築作業

10月9日(土) 晴

9時友軍重爆1機が双発2機と共に飛来して飛行場に着陸態勢に入ろうとした時、低空で来襲した敵ビューハイター機と遭遇して、敵の1機の攻撃を受けて炎を出し空中分解してトア岬海上500米に自爆する。敵機の追着くと見るや忽ち火を発して一瞬の出来事であった。衛戦闘機の1機は上空から急降下して戦闘機の中に突入したが、レミアン沖空中戦のあと反転海中に自爆した。他の味方1機は上空に在ったためこの戦闘に気づかず、以後飛行場に着陸しては給油をして夕刻まで上空を警戒する。トア岬沖の自爆機に対して救助隊を差し向けが生存者は無く参謀の上衣と身習士官の所持品、准尉の襟章5人と予想される遺体を収容した。宿舎附近で椰子林端か森坂見習士官と共に敵機の跳梁を逐一目撃していたが痛憤やる方ない。

10月10日(日) 晴

昨日レミアン沖に突入した友軍戦闘機の藤倉電線製の落下傘が収容された。

10月12日(火) 晴

午前中見習士官集合教育「化学戦闘」の学科を中隊で実施する。学科修了后、幹部候補生出身将校に対する希望を述べて激励と共に率直な意見を開陳する。現下の将校団の実情では出身の如何に拘らずこれら見習士官の健闘を切望する第である。昭和15年9月我々が見習士官として聯隊に着任

した時、先輩の泉尉から「聯隊には種々の出身の人が居り決して陸士出身だけでグループを作っはならぬ」と戒められたことを思い出す。

10月16日(土) 晴

靖国神社臨時大祭に当り遙拝式を行う。午後、見習士官集合教育「対空、海上監視」実施。赤痢第1回予防接種実施。

11月4日(木) 晴

高射砲隊(4門)敵機迎撃の配置につく。同隊の奮闘と武運を祈る。

11月6日(土) 晴

15時ビューハイター来襲。高射砲は4発射撃したが効果無し。



11月7日(日) 晴

ソロモン、コロバンガラ島附近で敵大型空母1、中型空母1、巡洋艦2、逐艦2を撃沈したとのニュースを聞く攻撃したのは雷撃機14機、哨戒機4で損害は自爆3機という。

11月11日(木) 晴

午前中ビューハイター3機来襲。高砲砲で1機は煙を吹いたという。本日搜索隊の軽装甲車中隊到着して松本中尉来る。

11月12日(金) 晴

軽機関銃命中試験射撃実施。

11月18日(木) 晴

15時近くB-24 3機南進。高射射撃するも効果無し。16時友軍海軍戦闘機2機飛来する。

11月23日(火) 晴后雨

12時30分 B-24 1機、南方ら高度約2千米で来襲して聯隊本部休養室附近から第9中隊南方50米の間に100疋程度の爆弾7発位を投下する。休養室附近で

は1名戦死、2名重傷（后刻死亡）。

11月29日（月）晴

聯隊長統裁現地戦術第1日 カンダル部落附近で実施。

11月30日（火）曇后雨

現地戦術第2日、カンダル北方4軒付近で「対空挺戦闘」を実施する。ギルバート諸島付近に来攻した敵に対して海軍航空隊は戦果を挙げつつあるも、地上部隊は通信杜絶の由で玉砕が予想される。

12月6日（月）雨

ギルバート、ボーゲンビルの戦訓から敵は多数の空母（20隻以上か）を使用している様子である。15時敵機1機雲を縫って南進。

12月8日（水）晴

謹んで大東亜戦争宣戦詔勅奉戴の日を迎える。昨年12月8日以来此の1年は日本の前進は無かった。第1年度の大戦果に対して第2年度は内部体制強化の期間であるなら、第3年度は決勝の年たることを希う。

12月12日（日）晴

13時22分伊勢神宮に向かって勝利を祈願する。この時刻は昭和16年12月12日 大元帥陛下の伊勢皇大神宮御親拝の時刻である。

12月13日（月）晴

昨日の偵察に基づいてリングット岬水際陣地の構築を開始する。岩盤を避けたために工事の進捗は速かである。

12月15日（水）晴

聯隊将校先任順序表を受領する。115名中22位で古参の部に入る。

12月17日（金）晴

午前中4発3機北進する。無限の包容力を涵養したいと思うが放任、無責任の境界が明確に把握し得ず淡々たる心境に達する修養は難しい。

12月28日（火）晴

防衛団長柏少将統裁の防衛総合演習終了

する。平素における訓練、準備の不十分を余す処なく暴露した。

12月31日（金）晴

昭和18年も終了するが、空襲におわれるのみの苦闘の1年であった。航空力の劣勢はソロモン、東部ニューギニア、アッツ、ギルバートを失って、日本にとっても苦闘の1年であった。敵を攻撃する戦闘は1度も無く、部隊の士気は低調である。八百よらずの神々皇国を護り給えかし。

昭和19年1月1日（土）晴

7時中隊全員整列して宮城遙拝、聖寿万歳を唱え皇国の隆昌を祈念する。

2月13日（日）晴

中隊の宿舍の位置は他隊に比べて健康地の方であるが患者多数なのは指導に反省の余地が多い。

（5）航空士官学校に転任

2月14日（月）晴

陸軍予科士官学校生徒隊付に補すとの命令を受ける。

2月17日（木）セラル島リングット出発
サムラキに向かう。

2月19日（土）サムラキ出発

2月22日（火）カイ島トアル到着

3月2日（木）トアルから海軍飛行艇でセラム島アンボン到着

3月16日（木）アンボンから海軍飛行艇でパラオ、コロール到着

3月19日（日）パラオからサイパンへ

3月20日（月）サイパンから横浜到着

3月21日（火）陸軍予科士官学校着任

5月16日（火）陸軍航空士官学校生徒隊付に転任。（

11. あとがき（編集子記載）

諸隈区隊長の陣中日誌を6回に分けて連載したが本稿で完結した。しかし本稿は非

常に長文であったので断続的に重要項目を主にして掲載した。

ジャワのスマトラからセラム島のアンボン→ケイ島のトアル→タニンバル諸島のサムラキ→セラル島のアダウト→同島のリンガットと転進し、最後はリンガットで、ニューギニア方面の友軍の敗退の報を聞きながら、連日の敵機来襲の中飛行場と恒久陣地を建設するために中隊一丸となって奮闘してきた。その間兵の教育や上官との接触、中隊長は多忙を極めたであろうことはこの日記の行間に滲み出ている。

初戦以来苦楽を共にした部下たちを残して航空士官学校に赴任してきた諸隈中隊長の心中や察するに余りあり。(第1部完)

諸隈中隊長陣中日誌読後感

此元 志津範 (54期)
予科25-8区隊長
(東京都練馬区)



諸隈中隊長の昭和16年10月1日以降の陣中日誌を拝読したが、空徳の間長期にわたりよくもこんなに克明に落ち度もなく認められたものと只々感心敬服するばかりであった。

私も陸士卒業後直ちに中支第11軍(司令部漢口、軍司令官阿南中将)隷下の第40師団(四国編成鯨兵団)歩兵第236連隊(高知編成)に勤務したので、拝読しながらその状況を想像したり、或いその頃自分は何処で何をしていたらと思ひ起こしたりした。

以下拝読して感じた事を次に述べる：

1. 全般にわたり沢山の部隊や上下を問わない沢山の方々の名前及びその時の状況等が述べられているが、これこそ陣日誌の目的の第1に当たり立派である。

陣中日誌については我々にもなじみ深い教範陣中要務令の最後に詳しく述べられているが、その第1の目的は戦史の用に資したり、各人の勤務功績の銓衡の参考に供したりするという事であるがその目的に十分に合致している。

2. 責任観念旺盛で誠実、万事率先垂範で一貫していること。19才で中隊長代理を拝命し率先垂範以外に何もないと覚悟をきめて着任しているが、その後の統率戦闘指導等によくその気概が認められる。自らも戦傷を受けながらもその指揮対処等天晴れ

である。

3. 常に愛情をもって人に接し、上下からの信頼も厚く立派。機会を見つけての病院への見舞、関係部隊への挨拶回り、特に同期生との関係に留意していた事は頭が下がる。

4. その他戦闘後の反省に基づく教訓の整理、積極的な情報の収集、適時適切な決断に基づく対処指導等々教えられる事が多かった。

私は60期生地上の卒業式翌日、61期生担当を命ぜられ、8月11日に群馬県中之条に疎開した。その翌日に、4月7日機機爆撃により学校で戦死された7中隊大館政義区隊長(54期)のご遺族に対し天皇皇后陛下からの祭料をお届けして来いとこの命令を受け、13日中之条を発ち鹿児島島に向った。途中岩国付近通過終戦を知りびっくり、大急ぎで任務を終わり23日中之条に帰った。ところが留守中、私の陣中日誌や戦地での地図等、戦のどさくさで全て焼却されており残念であった。

私達54期生は支那事変の始まった昭和12年12月1日、人員も2340名に増え、市ヶ谷台に入校したが、戦死者が1/3の890名、物故者が約半数の1250名、そして名簿上の生存者が約200名となた。今、年齢的にも最も若い者で92才、心身共に衰えを感じさせられているが、先立たれた同期生の為にも天命の許すり頑張らねばと励ましあっている。